三笑客者評判記 初編 上

百拾二

号 清 年八文

特別
八13
4303

序

[illegible]の御[illegible]に其[illegible]を[illegible]る
[illegible]三馬愛小[illegible]る[illegible]筆[illegible]
[illegible]住付の大極[illegible]の黒ふ[illegible]の
作者[illegible]中ふ[illegible]日の出[illegible]
[illegible]番[illegible]紋二[illegible]と[illegible]る大[illegible]
のこケの[illegible]ふ高[illegible]
さ[illegible]べ僕ぶ祖[illegible]
作者[illegible]百[illegible]の著述[illegible]
[illegible]中ふ役者[illegible]義[illegible]
家に住[illegible]今[illegible]僕[illegible]
年毎に[illegible]

武蔵うと人その義を仲介に表を
ものくるれ物の品定め癖を穿て
迷のしゝを義仲乃関もあれば
扇きよくあふいるゝ鶯くすし
羽をのて鳶色は便りふさわゝば
扇をくゝまるゝなしとわゝまと
ちゝに紙を呼ひ品の名ゝ
情をかゝきてゝとあんり

未の正月

八文舎正徒
自笑

世ホあて二すあ
八客者評判記初編三冊巻首より大尾まで
文体八文字組八文字屋自笑の作調ふ微しほて
出あゝしまゝる西鶴古風のたゝ仮作ふゝ本
むゝ物の癖りのまゝ作ふ案のゝちまゝ世
また後て洒落の本に初めて国貞と記し
本りなまゝ作ゝ事ゝ
えんゝまゝ後て十分の内五分五リるゝ
仮名より本さろふまろて
ゝ人のゝ書ゝ
ゝりもうゝれども
ゝさゝ人まて
いとさゝゝゝ
五下五リの
山風賃をゝて十分
吉郎ゝふ戯作者の
先ゝそのたゝ
江戸武市隠

武亭三馬敬白

○見物花の比は孤ふやゝ遠方より来る貴人芝居見物たるとも其あそび我れ
序有
より紅葉どころの三ヶ所どこに沿て芝居はさふにものかど
こゝの所は芝居仕様同ふ見聞ふる事ふ聞
とてうとゝはれなれども甚雪ふ降りてそ雪ふふらぶ
桟敷ふ向りていまゞ楽屋の招ふとあらざれば向
後行とやひたちけれど余大坂より客多ふ来る
まで向ふ様くゝ有りなひうたてけれ月ひつて
芝居ふる事なり。道のゆくてもは桟芝居ふも粗一くふ見
せどやとなれ。一般ふ歳と倶ふ来れてく紅葉
白いの陽裏まていとうんとて。長紅葉山ふ尾張の
国ふ名高ふより社風の行楽ふ行ふ。名と高用
芝居ふ行ふる事ふ小田ふ社桐尾上
ちうきえする芝居もすれて大盛や。北ふ芝居ふ
けりくいとき出とて木戸ふ草詩も休ふと見ふ

ふうねど草鞋にとうれてふ肉刺を潰出て藤要毛一生
飼ひ殺の恩ちりへ牧場ふ向りめさ大海馬の
退ひ柿ふにあるまふふそ獨楽の寄さんぐふ茶屋
床机ふ尻かけて。ゆつとまうせと庄屋抱えうあり
富士と高のぐる見も一山八文の安烟草。飲人と
ふきそて更同酒をぐいと一息。ゆつとふそ横咥ふ
豆腐の田楽。造りたけのゆうた味ふ小道具方
の畑具ふ走ぐた芝居妙見参ふ芝居ふ
姫ーがりつこぞふ猫のやうふ飯ふ猫ふ
ふふ乃手馬ふ白酒壁間ふ
焼鳥ふ
今晩ふ宿ふ泊ふ
一応の銀無要ふ
走ふも尾ふぞ揚ふ二枚紙加減の酒。酒掛ふ余ふと
遠ぐた仏ふりふ一応。変ふ見ふ

不持なるゆゑ、何ものもせよ、思ひ付場のわりさまざまやよ
みなと思ひどきめるとそ落て繰ふ焼痕もギツクリ、ちくそ
恨りれ〇い、事なるぶんなれてイヤ、ねぶ、言まおいくんやら、
さてら、稲くまをやまとこそ料理場へ、ぶ、ぶまもそまのい
とハ、拍子と更ふ白をまの手摩れ接拶、これも芝居で面
白いとあとりなぶら、叔おれるのぶ、ものいぶこに真さる、武
狐の皮れ洒てあるぶあまりくまを事ぶや、ヤトハ、ばとこ、ふ
事でハさるまいつ、ぶ、へ、ぶ、ら、捉ぶ、ぶ、ぶ、

義貞さんのぞまれて六一首一章綴へも先へも書
かど。返答のさざく悦ばせ山伏義貞はゆきこれと
雪道へ義さねどりの首ふりちぢてあるをゆけと
ヨイくと沢らるゝ声ハテふしぎな家まかり宿沢
のとあるを見もせ。ノウくとよぶ声をヨイくとよぶ
かけさん白地で宮九郎でゐるを出ると猫ちと猫迫
義ろあり。煙草の吸殻ハ吹ちれと。袖ちとらふ義
もゆき。雪のうへ暮駒とあて。留てさまふぬるんとと
小宮部順ひるぐら。ちゃんくと追ふろ小田原の
義行馬。江戸で附出の奥義とうんえでふ追ひの
花助といふ名うてれ馬さいき世死と去り着ヨイ牧方
江義行へ江戸送りなれど馬を乗掾の同盟場まで
りまきる。雪ハ降る義さ八寸（奥義のだろうで追そ
りくもゞ貴。ちるゞ酒ふ温りたのだろう。ちんぢでも
然行ふ酒代者て待ちゐ居の常役が

合羽羽織とぼみて用ゆ者ちとゆるやうに長い
つけられとあり平れ月拍子。花月ちゃ小合
使さう出いれとゐれ中ゐ。ゆり孤崎れば
ヨウト祝方とゆて幸ひて寄ゆ荷鞍ぶかくゐ腰我
のゆとぐらゆ。ど地て学のまちゆとぐゐ（ゆぐら
馬の後へ立ゆりて。かとゆとさまるゆちゆ。ゆ
合羽ゆ。ぶつとさぶ。ゆコリやちんぢや。正て狐
の尾屋ゆとされど流石ハ街道ふ若ちその孤助。ふ
喰ゐ鼠ち。道行ふ。ゆ出ゆ平く野狐の化損ひ
めいよぶ義の中ゆ奥を盗んで郷ら伯母を引ちゆ
つりゆ。おれと一ゆ。ゆらとゆふとい好きふ孫の反と
かのとぐらゆ。ちゆくめちゆ。ぢれちと何ら。ゆ
ちゆ。イヤヤ。ゆ方ゆ人ゆどれらゆれくぐゆまぐ
とゆれゆ。おれゆと方ゆ。ゆらゆ長ゆまで。ゆて古屋の
堀町へゆる者と三ゆりゆ。ゆ。ゆの森稲荷の

ゆるとしべてそれは堺町のつい鼻先。ちらもおれが
別荘がのるといふ。あれは結ひはおのれらとへの
別荘どのを赤牛の多塩でおれが別荘とそれまくしゐ。
其上ふ我ちびが別荘といふもおし。ミテもようへ大へ
怖しくこぎらなるとしべ。ぐんぐんもあるもの機ゐ乗る。
きまくべもイヤさやどこらいのもちろねが。抜道やなどで
取巻きて入ぬり。公能もないのぢや。春蘭玉生で
といふものの仕方をいつても通ぬゆえおどを知仕方
がないと言れば。我ぬいと公ふおしておのれ丸と怖がる
ムせふ公能ちもきの物語。そと上おのれ。玉生で
ありがらおどもかの仕方がないと盗人猫ぐーい
土蜘蛛ドレ。祝方。春蘭鞍ぐいぐんでぶるい。私
吹寄にすりてござれと鞍の後へ玉乗れば以前の
ぬく流尾へぶふ。よりこ。あれい逃きねちふ。縄
でくしてあれとあれと春の縄と解でぐんぐんぬ。

首をちつとことらく左右ともに鞍埼へかくしてふ
ちふ対れいりと物をちつちふ。ちらく蕃てアイタ〳〵ヒヒ痛い
ユリヤどうぢや。玉貢ぐちぎれるくつついでないことどう
もるのぢや。アイタ〳〵。ホいろくと新ちろいるとハテ狂方
ちまくハ泡ふ砕ことはとこゆ。長ぬちうに結付ほと。
私ぬふまそごぎりまそと是とあるそりくしろふ
より。ちぬ。解の馬追ちるとあ助声ちけ。ユリヤ橋をよ。
晩ちふハあれぬ団へ来い法ちぬ。ふぞとしへ陸物
とハ物ぢや。ア汗馬ふつけことはい馬れ上ちるるちや。
ハテ。後の方ちうはいふいふいて橋をハうしろ方ふ
立ちれべ。ちなちぬ合羽の下ちう。ぶくをさぐり
狐の尻尾ヤアと。傾り走るくも例のる声。ユレ。あ助。
よりのぬぐまふ入とふ。晩上ふ泡一升さびそゆぐ。そちう
逃とちとしべ。ちまとて逃きうぐいコリヤちい長縄
でちうう。ちと付られべ逃ちとも逃られね。ソリヤ

五渡亭
國貞画

生馬さ、は頂平塚より仁義めゞ魚義二義がま
されともあわてこと無りでゆうぞい。ヲサはの岩ら
えて耳さ生員二人のふ涙は頬ニつ流れさも。
ゆくべ安ゝでやらうぞいゆゝで晩ふ結で居る。ヲ合点
ぢや、と別る〻拵ふ。ゆとうふ後ゝ居る。ら沢のつとうふね
又拵たら。馬さは出も馬の耳風入とげき雪ゆ
に対入穀孔の手足入海苔。奥義て上ふかゞまれ縄
同の痛法ゞゞく。コレ〳〵馬さの。酒弾ふ。ゆ意さで
ゆくた沼入蛙果さ。まゞ足首とやどのそ下されちだ
わるゆうみといふせも果ど。ヲ仕山ゆ畜生ゆ。今と
の罪ゆゞ。ぢや。ちゆとゆる痛ふゆ又いと振逆て
ふゝ三つくれゞ。ゆ物ゆ歩つ肝を消。コレ馬さ及とゆさ
入馬とゆるゆとゆくべどうゆらおれをゆるゆうぢや
ゞどりしことぢやだ。ゆゞぢやゞしさ示ふ。おのれゆる
まいとゆふ。話貧も出さゞふ馬さのゆ。上ゆ出果入

甚美義をいゞゆうゆとゆる出良狐ゆ。これからふ
言語ぢゞ。ふ今も持をとふ入合さ。ふ晩ふ
おのれをゆゆ殺て汁ふ樊て食ふ子宵。今一朋ゞ
生乳の男ぢや。記念ゆ拵てけつられとゆることふゆ
又拵方ふつ。馬の上ふてふゆ出。コレ〳〵馬さどゆ。
ことゆとふ乳ゞ。表ひ出ふ。侍ゆ殺ゆとふ
情ゆふ曲ゆるゆ。完ふ三人ゆゞ明ゞ自体ふ入い
とゆ約束入ゞ義ゆ。ふ奥ゆゞ。ふ極て。猛酒ゆ前ゆる
とゆとゆきゆねふりて居ゆ。ふ人ふ入ゆふ人殺し。
人ゆ殺て考て食ゆ。神武ゆ薄ふい。ゆふ。人
食馬ふゆ相ゆとふ世ふ流ゆ。ふれゞ人食馬さ拵ふ
の拵ゆとゆきゆくゆふ。ゆゆ。ゆゆ拵ゆとゆゞ。ゆ涙
ふ交ゆ渡ゆふ氷拵とゆるゆき馬の上合祝と伝ゞ。ふ法
居ゆる。ゆ刻ゆ。ゆふ。ゆゞ。ゆ雪道。ゆ追ゆ三ゆ。ゆ。ゆ凹
ゆふゞゞ走ゆれゞ。ゆ義ふ。ゆ。ゆ平塚ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ

つるぬ。サア壮る狐の化換ひ。今うち殺してくれんぞと
指ふり上れば身を縮め。ノウおそろしやゆるしてたべ我は
化さとおりの稲ども尾ぬ。尾ぬ。ふれ。面目ない。今
つぐと考ふるに。そもそもこれは。そもそもこれは
はおのれが宮居おのれを祭る社。ちゃうと又ひと
そ尾尾。といふて。頂りて。おたつさてはけ尾尾
我ホンを狐と思ふて。これはさて細いめまぶり
けを宮ゆるめてよべ。ゆるめてよべ。ひをはしやさん。アア
どうく。縄をのがれて。ぢやいとふとい奴そのま
ぢやゆるめとめふぐ。西。面場の向ふ。ちぢく
と声をかけて。出るハ出れ。射ハの出臣。る男女三人。
めふちふはを割て入り。我ぬ。向ひ。ハ。汝ら。
なるれど。えけ男ハ狐ホ。一且縄をゆるせ。上樂ホ
人をそめるるるハ。汝ら。卒忽を。悔ぬ。又いく狐ホ。寃
らぶれば。過の料として。汝ホ。今ホを。ぬ。ぬ。

ホも我ホまぬして。ア。和せよ。とありければ。ア。物なん
ぬ。ア。ア。ア。彼。ア。人ホ。一れ。ア。ア。ア。
我ホ。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。
ア

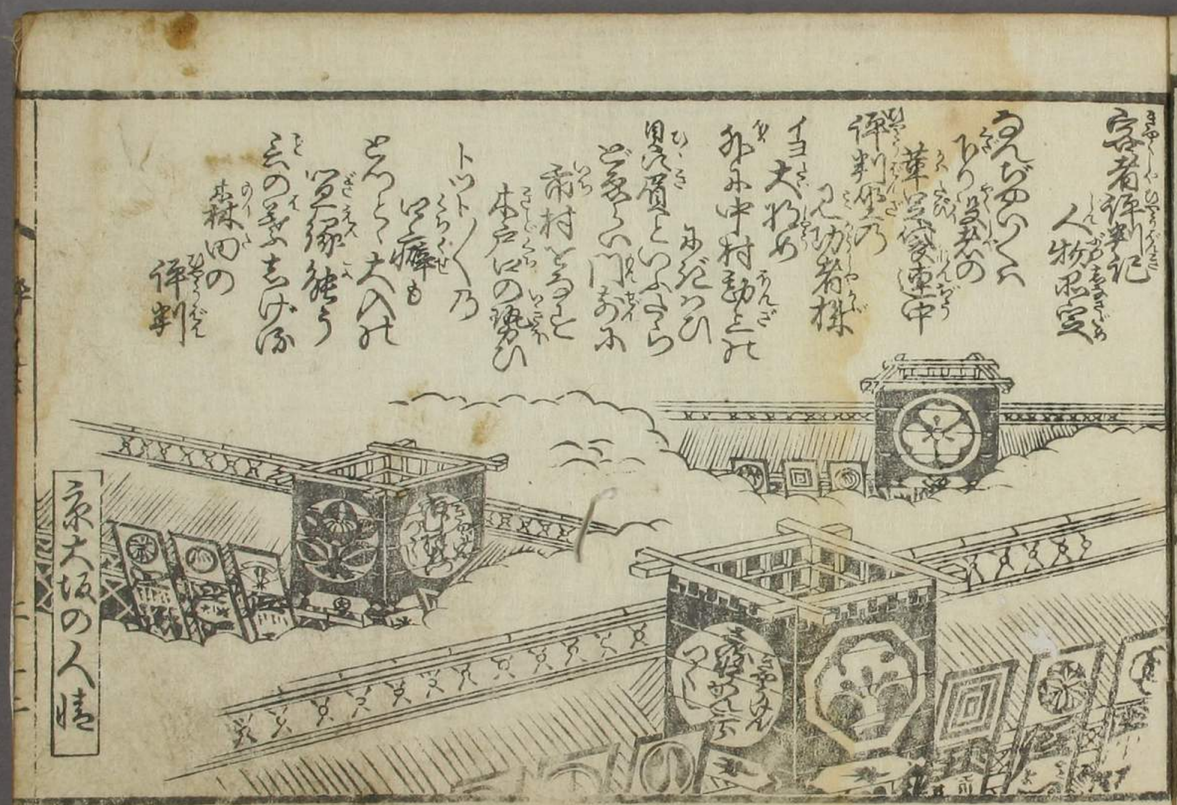
あらられて居る遊を殺さうと唐山まで出かけて八年目
我切と泣る神ふ寄しく我が名雲ふ出たれて八年目
つる妻ふ我や、これ別つが妻ふる出雲のお國ふ
名濃屋山三郎とつれて芝居を浮世の氏神まつり
我女房ふ先へ名を出る流石ふ浜世ふ色ふ出こ女
家へ入まの悲しと神にあつてもあすまいあるくねもあ
うと思ひあつ思ひて和たらう、ゝちると平助て感涙後ゞ
紙優あるぶ安くふでも十あどろど涙ゞる、ゝ付
も國太夫神仏泥宜ふ日ふ物をつ泣きるどや、西語
皆夏八文字ふ目安とふりのよく前新後れ道ふ
安く、地役者ふ藝ふ浮利記とふ世紙
やしくに書と役ふ國ゞの法見物ふ月二日ふ藝臣
をめゞそひ封切とよくふと浅ふいどむ手宋ふ
めどけあいふ約ふ河豚ふ命ふ小 封切ふ
酒情やらふ生まるふとふ出産ふ釈ふ再湯ふ浴ふ

よどれ変りて本ふ備りやうくふ歌くときけり見
らいふ物文盲ふ族ふれば絵ふ、てうわ、そ歌くを
だまって居れば、まどりのふ、ふりもせね狂言ふ
こゞ山さの変ゞ役ゞのとうん切者ゞじて役者を罵り
ふ日ふ狂言ふやうに治り、きうね怪るもきふ三
変狂言方ふ役ふ三ゞ入組むとのふの偽ふ分る
けるふぬのと茶屋祇り付ふ待ふて尚拍子の
往ふ下し役者の仕打ふ日ふ究ふ二日ふ演ふ
ふ、めゞでないと浮利入りゞあるふふのと論じ
つゞ浩ゞのいゞふのやし今ゞつ幕ゞつ高氣で
ひいふ女形ふ持病の疝氣とのゞせ汚ふひふ役
をふ例ふ名人ゞと癖をつしていゞぎるとふ役ふ減ふ
芝居者とふりめるふ、これふ見負ふ見負倒
ふふくふふ見負りて芝居ふ絶ふ役者ふ
出世とるふふ方さふふ存ぜど一年三百

六十日四季ちりくれ狂言にいりほどふ四つ物。
千差万別ものごさまざま。東はくの嘆ふこと。西
のくは好くことあり。南はくの悪くいへ北のくの
ものとそのいろん物の癖といふ癖性といふ性ちがう
ことのかげ。芝居紙看板とおてある守護れはに
交て摺風はとうらうえもやーたなびどうもくね面
ゆき。イヤヌいろん物が狂言を出ばどうもあ茶屋
の方からいろん物と見と示へ。ほどの一奥てんや
たまくふ。今まで悟くね別世界。一大寄記の住
境あり。ちうや絵虫の場ふのそあ。かそ人甘味ね
諸見物。眉ふ八字の頬をよせ口ふへは字の筆
意紙めらに。表向らべそを逃れば我を忘れて
泣くもあり。おらく羅て涙をかこたまりはどして
うらくあり。白粉をぬて眼赤なる四ふ口ふ。
紙をもみ。唇紅塗て目と睫を地の鼻ふ東ねと
手拭を腰へり。泣ふ赤て笑ひふ張せば。ふる
ふ者のひそ後向。折からの道行形の。ひこ先れ
ば。然眉たちまちにひくけて。ほ面笑と食みな
ら拭いて。笑ふ。ちうにた三階の耳をはふね。
かくる下人。蔵ふ。三本太刀。つぐも法人の為た
つれて見物おのれと眉毛と初ヒ目とうとり出ば
ふひあどりて。笑ふは切と嬉ゆるどく。瑞とあふと
抹額を正ーうして。ごめてあるうえおれあるまの
高ぬことを。ふ西湯ふの場ふの霜笑ひ。ふ富士
めとのくるへ。巻頭の意ふ遠へど。打擲の場ふいうう
て。鬼ごあうると。馬ふへこて。流ふもなき悪態。
ぞー。大根と咲くいあみ辛味。役者とふ
ありがこ迷惑。イヨ今。箱の千両箱。イヨ。新玉の
大ふ。拵。狂ふいうう子の出世ごふことトもく
繁昌。おまよ。開山役者。氏神ようそじゃそ。

後世に芸苦労といふるまで、あれからね役者
もあまえ我ち獲れ加力をくらべて、仕て後者の評判
紀へくくかゆて義知の幕明ちゑくかちくく
返したるくこ人物の正宝の明ちは一巻を移るまで
客者評判紀の及五役をつとむべ・ちゃらぐもの役
洪浄潟濁七語ふんとたく我儀とりて頓ぶ茶屋
にのりつぶ若くい勇拵変をなさんとろで
直ゆ素ぶく茶番の正元とのられとお国山三代
吉郎実のぐせの今ひとくべり大磯の茶屋の
一睡これより芝居ふ物左傳つる客者評判の開に
く。

作者
こ馬



嗚呼江戸の極上上吉
江戸っ子の粋
昌賀の性オハ
喜の字と西落を通る者
其名を言へば
ぬ〜わらふ
扇
とば
ソレ〜〜又歩も遠ぬハ
わる〜〜紅言乃
えん相撲集
ハテそそぐ江戸
之芸能繁栄

発江戸三芸居客者評判記　粋客者目録

昌員　八百八町　町〜風呂屋
評判　四里四方　けん〜賢結成
○人之長所ハ長所ハ之ヲ舞頭ハ寄ル丸のごし

三幅対
無類

江戸っ子　流行
大坂人　一流
京ハ都人　風流

たゞひとりあるそ江戸昌員一枚元年の極〜

▲立役之部

立役巻頭
極上上吉　昌員定連　英雄
いろまでゞきのろまでゞ色入ろね五大方

極上上吉　志だ内好　執心
芝居とあれハ解ハえらゝ四季の模久

真上上吉　見功者　調練
よ所を初めから〔見るめの次〕こと

上上吉　芝居通　穿鑿
芝居ばかりけてんまの〔ものしり〕まぶり

上上吉　沢紅　通情
わるのおそんだ手くせれ〔を〕性の三日さど

上上士　役者気取　好男
役者の仕ぶりことばかられて〔ものしり〕れ〔ぶり〕

上上十　桟敷媚　好色
いちばん〔ものしり〕さて〔ものしり〕人のいきどを〔ものしり〕ごま

上上士　産見頁　偏頗
我ひきうとぐらしいたいと重ねぬきせう

上上士　氷振好　格別
ぶかさちへよやどきてをぐさ〔ものしり〕相る弁

上上士　耳色好　格外
それくのに俗をとうくりを〔ものしり〕ものしり

上上　のんた郎　癡呆
いつとても芝居がくさの人おの〔ものしり〕ゆうれ月

上上　行き乱者　狂者
紙ところのらちをぢを〔ものしり〕きしし三ぢ

大上上吉　我桟敷の子猫　廉直
いつもなく香もるた上天の〔ものしり〕おびろ月

▲親仁方之部

功上上吉　古実者　記憶
あり〔ものしり〕れことどもを猫ものみ弁

上上吉　昔昌頁　老功
助度活がりのものもとる〔ものしり〕の〔ものしり〕ら建

▲實悪之部

上上吉　でんぐらう　強傑
ものあーを出さぐふ〔ものしり〕ものらくの弁

上上吉　役者好　時花
見負いろいろふいろくの「立ち」服装

上上士　酒好　撒懐
おすいものどうぐもいろいろ

上上士　料理好　風雅
茶道でおごりのさその中とが「吉原」服装

実録巻軸
上上吉　樂天書物好
一すじたたきしいろりが「ゆり」通

▲歇役之部

至上上吉　喧嘩好　殺風景
又してもあふそひの「種」まきこの愛

上上吉　つるくち　失後
わしてぶつぶつひの「門」を出る弘

上上吉　堅意地　非礼
いひ出してからかの「今」面服

上上　さつま人　狼藉
よそ目ろうろうとしたるの「狂」乱吉井袖

▲道外形之部

上上士　居眠好　不風雅
狂言ハ人もせのであるこの板と「枕」慈童

上上士　きいこめう　假在行
ちろさろうれまるこ手い「臨」衣

上上士　新五左　律儀
大切までさそれど手を「ゆ」ぬ「門」ちく名鳥

上上　高ざる　多辯
げんあちちきあ治もとく「俗」子「言」尾きび

上ト　田舎人　篤実
ひくどりとうもよ「や」より系さぶめ

上　けち助　質素
つろれねも抜れねも今ふらとの「摩」ふる感ち

上上士　ひんてん　困窮

▲若女形之部

極上吉　お宿さぐり　淳虚
雪ぐらす月仕まひの氣を「ぐぐ」

上上吉　巴　新造　凋達
まへびらら茶屋へ「ゆ」そけけいせい

上上吉　お　嬢　柔和
芝居とゆめていそくとびざろ「我さろ

上上吉　む　さめ　温良
いつくしね先ふ機嫌をぐ「むさ」七往

上上吉　おこのことさん　苦樂
子どもゆそうあり生まる「編」ま車

上上吉　かつ　左衛門　侠氣
芝居ゆくちろ「女」をけ六

上上　下　女　爰中
朝飯をちまふ山ま山ぐ「せた」ぐ小町

上　田舎むすめ　井蛙　上　山出し　おり　無我
はこを合ってそれべいまぐ「いろはのひら」紋

▲花車形之部

上上吉面　岩　爰どの　威權
はまそそいらいひまぐふ煙くまるこむ「白な

上上士　婚　老　婆　邪曲
ちふかく嫁ゆやまれはと「筆まを七事拐

上上士　さつ　親　老実
秋の落より子とちくハ世話ぶ焼世の「きぐそ

上　かつ　さん　美髪　上　ちぐさん　優長
上　やとひ婆　怪食

▲男形之部

上上　生嶽の子供　質朴
生ぜんの芝居をうれる内ぶ「義の子

上上　閑市宿ひ　欲樂
あるあ宿ちり子ふ者ちる行兼る「明の子

上　地主りけ子供　忍勢　上　なく　子　難儀
上　まとる子　称美　上　いとぐ子　迷惑
子どもだまに買ってまもとに「まり」風

惣巻軸

極上上吉　芝居ぶし　無心

世の中は人でなしもいわるる人羽衣

極上上吉　聲色連中

千秋万歳三芝居大繁昌

めでたくけり

當辛未春新版の出板　式亭三馬作

忠臣藏偏癖氣論

全一冊

初段より十一段目までの人物をあげて一〇真像を画き出し人の行ひの善悪を鑒定まうる。不利屈世を疑ひこれを評論おびしくくしらべられぬよみ本なり

惣巻頭

三幅對

江戸っ子　流行

大坂人　一流

京都人　風流

[江戸名目] 東西く世に初ち客者評判記の發端ニの淳れ人氣より発出まるいろ惣巻頭智仁勇れ三徳ふ表ーて三幅對といとさい絵ものゝ様ものゝ中かゝるかゝりまゝ [江戸ひなぶり] イヤあるゞくゴレヤイなんのうんちきもいんぐるつやうくちや後くのいおらァのりがるも東ッ子ゞゞ上方れオいわるを俱一にされちやァお蔭ゞねくいきもくまもくあくるぢうと別ふ仕やゝなるでんのと大の係もか精灵馬鹿なを安ッ面ぢや後くる [江戸通の者] コレサく長く後へごうさのんぐ小ッたこふ中の宗ときある斗りゞ江戸ッ子ぢやねく流行ふ濃れ男ぶぜハテ感服く

江戸をいふが真の江戸子といふ物。他国人の相く
も恥しいきさまたちのハ江戸子まがひとうて真物
ぢやねへ江戸近在の道者衆が他国へ行て江戸ぶり。
江戸ぶりといふきんもあやハやとそろて居るふてどもむ
が紙 いきさま それぐもおりくあつまりて 通の者 ハテさてく
もれ行せそこあれ 大坂のこと うんぢやい山家ものゆが
ゑのいふハ高で程ものゑのゑ安うもちらいで。芝居見物もた
ふせいあるくいたんう切りくさやてふ頭ニもあいぞこもと
ゼヨ。コリヤ江戸あるいう奴い放さいこてどうれた大坂を
別ゑ出てるくを 京のこと 否お江戸さんも大坂の方も
トトあんのが芝居のゑ切者といふさらハあるません。
トトやたいぢや。ひちやぢやいいのがうんぢやいのが
者でうてハ細うひどがんのいがなんのがあやらしい
そこ方れ傍倚て居やんせ。さこハ江戸きんあるいうぞく
どう對るふせいで京都を別よ出るく 大坂

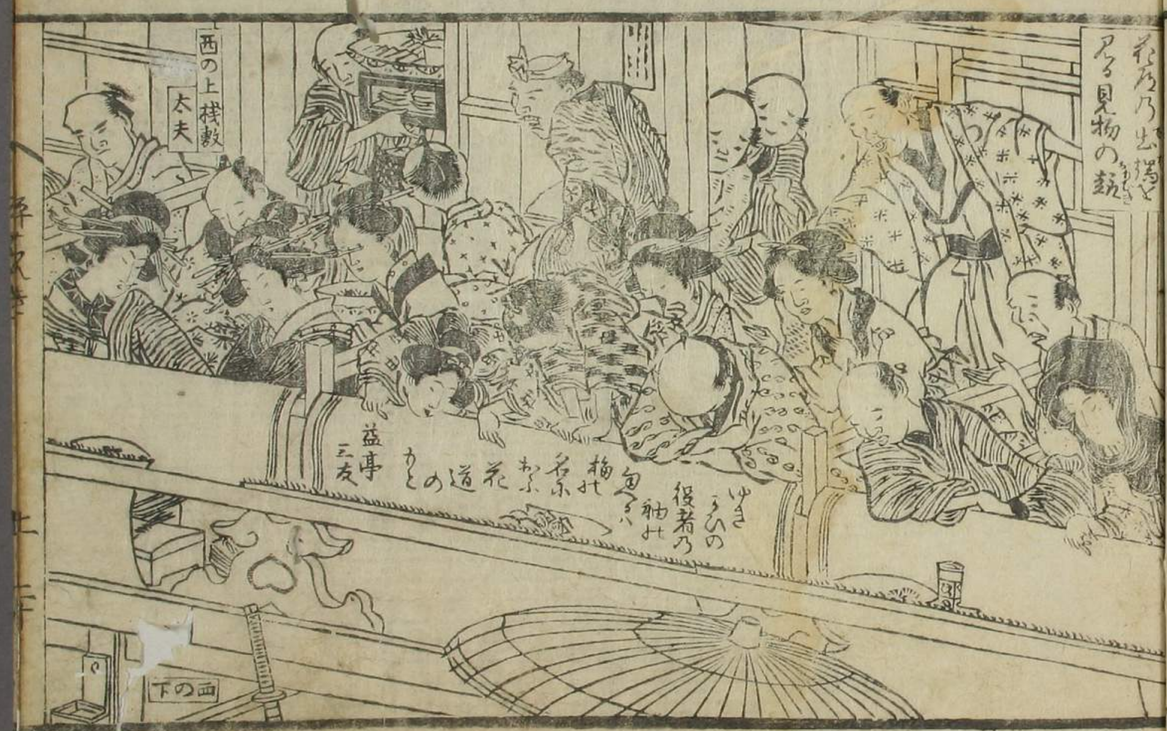
うんちやい 京 うんぢやとハうんぢやい 大坂 うんぢや
といふさら江戸げられやぢゆねやつとぞい 京 いふさら
うんぢやいゆれつぞこ迷の構ふこるひちやあいいの
大坂 ちこいつぞくく構るゆうあいとハいうさねぞよ
江戸 うんぢのくく。おいつらア名にとゑざんやくうゆ
をやつーやがうう芝居ハ実ア打生て高う位つぞ
も遠ふべい江戸ッ子ハ有がさきゆいぎあつとうふう
今の鯱をおうんで 大坂 ヨイトまつさの東西く。
おこ人ともちぢうくおれやさうませさあうに手ゆ
切てハムりませれ者さゆがこれ生国のことゆる
江戸利とハ者ま女給どかとふ好きうゆれいこと
ふゆ。ちるゆあり。おのく利と非と長と悪とを
ある者の後でうり者れべかくようぞこのこと
中庸ととりさこ福一對のうけ合を解ませう
諸或ハ者の説ハ曰。江戸の人氣ハ世ぞうく

大坂たゝ三十ばかり第八四十以上の手ねこゝろ
これいとうるる展と云るに江戸ハ廿年ばかりの事
なるゆゑに得とのりく。結合つゝ二言ハ
あの中にも抜入る武藤つゞ五りこもゝ身ハ
引うけ万事活氣かゝて使手ぬ一ととびむ。
されども作ふやさび大様ゝそ中一ゝまらね
ゆうふもあ面さうふようて後者の藝も自箱
の氣を春ゝ山代第一とゝるゆゑ荒るれ大方
一刀を打振れば十條級の首ゝ飛。或ハギツリ
ときあ。めるしハグイとふ〳〵んでえゝて藝代
ゝる。大坂ゝ三十ばかりれ手ねゆゑ中一分別
あり。行非を正して男ゝ立ることうゝ。作ふ
ゝさびこゝろゞ出りゝそ中一目移ら〳〵ゝ形
あり。さうふようて後者の仕ゝちもさゝぐふ
うりゆゝ〳〵まゝこゝ小切同ゝり。第八四十

ゝ
ゝ

ゝ
ゝ

ゝ
ゝ



自然と切ぶるる返事ナト これで多りましたろ
上方れもかさるが江戸のもかぶ切者ぶ
とおりまるぺいしのぶ角付おぶ江戸ふ切者ぶけ
ぶ今わど芝居ふのひふけさるのへ式乃丸ぶ芝居な
さるにようて、芝居の繁昌と流ぶまぶいのも
大入たのさり見物もの〻様ぶれお同の肥ぶ役者
ちぶ江戸ふ切者ふいとのるきれ式所丸ぶ活
屋上ぶれ式ぶ方まぶもりまるぶのるるぶ
チト小刀細工ぶ出しまるぶるる作国の人ヲハト乃丸ぶ
うもいろさく 大芝居 三福對と西ぶどうもいへな
乃丸の捌ぶやぶ 芝の浮 中ハぶるるぶ
一ツメてぶるう 乃丸目 それハぶるる有がさい
シャラ〻いろふてぶ芝ぶのほ中ぶるまーう
ヲシヤシヤンのシヤン 乃丸 さ〻ぶ見ぶるるぶの浮の
ひいきぐのも後のぶ〻まるく

東の高土間
前土間
外形
平り土間
本ぶた
荒戸場
見物の

きの山乃ひとゑふ三郎
虎たかひく
乗れ羽目条
楽亭馬笑
西ノ下のこゝろ
鬼彼
人くき
ひけ
さく
ゑさ
ぐれハ
ゝろを
通る
羽ハ条
ぐもさ
武亭三馬
役者の楽屋へと
見物の影
村柳の場を見れ
見物乃顔
本花乃
売高ゝろふ
ヤイぐゝぐ
あゝゝ芝居
昊賀連中
武亭三馬
芝居ぶを
芝居ぶを
芝居ぶを
の
ナ医者
三馬
友ゝゝる楼田
左文ゝのゝゝ
世話狂言ハ
よゝ山
和ふまゝふき
花の楼田
益亭三友

上桟敷
西の高土間

向桟敷
武亭三馬
古今亭三鳥

ちやう場所尽体

高ちやうてうる
徳亭三孝
幕の内と下ゝを
ちゝ抜けたるちやうふ
茶でをのとりの
こうぶくてて
尽れて

ちやう場とる
尽場成
ちやう

腹筋と
ちやうも
ちやうれを
高ワてい
ちあハばなる
わうゝ
けい幕
式亭三馬

中の巳

江戸子の芝居好

こゝゝのくだりも
又ふえさ中しの
せまへうう
わうぐらう
九三がくやいう
城ぢがこ安いう
ちくまうく
こうれ

江戸
なゝ抜や
花の兄弟を
各別ふ
このあう
ゆきも
さんと
尽えう
三馬

去ねき日「とゝ様てゆるの恩うくびとゝ様させてと
恩ふ」と小声ナンダ堺町の使ゞ来ると何へ
こゝ巣知ゝよく〳〵よく二両物ゞ働けこの。お教ゝ
け琴と書斎へかゞぼけさせて下せ。トキ二徳さん
三郎とうとてゆるゞ甘ゝ社もるきゝ息子ゆ
どれもく器用ごまゞ市川七代目大喜右ゝ門顔
ゝ甘ふ暫の紙へゝ雑煮ふ葉けゝ喜ゝりのゞ
だんまりと花ゞ嫌ゝがるゞめれいゝく寸も軽ゝと見非
ゝくちやゝゆふゆ市川の様ゝ三芝居の名物毛せ
の乗見ゞさゝむしの役者ゝちふ役へゝ白猫居
ゞ不拵所で素清ゝ射ゝゞじやめとゝ人九と
屋敷をゞくと震ゝ西ゝ木場の親父ゞ口跡の
うゝゞゞ今耳ふ孫ゝてゝるき。ゝよゝゝ宗めゝ
岩敬のゝ三座ゝ三ゝゝるまゝ。ゝ人ゝゝ様ゝ
還暦ゝ三津ゝ麦遊法ゝ口二位脚ゝ造ゝせてゝきゝ。

日長貧乏と云ふ事もそうくゝ和ごろのごらう。市川流
の狂言ふ江戸ゞ一大隆盛ゝと云ふちゃゝどうもゝ
役ゝゞさゝるまゞ社ゝさゝ。何でゝ江戸の芝居のやうだ。
アイサ。市川流ゝ長貧ゝ去ゝ役ゝ者ゝ江戸ゞすゞやゝねゝ
のゞ。ハテゝゝゝ江戸者ゝ一件器用だゝら組ゝまゝるゞ
ゝ云ふ義ゝ手ゝ節の左手ゝ出ゝるゞ。上ミ方考ゝ江戸
節を清れゝと云ふゝ手ゝごらうゞだゝゝ上ミ方考ゞ
小手利ゞの細いのゝ味線ゝゝあゞても。団十郎のやう
に唐まゞゆゝえゝ役者ゞ何へるゝのゝえ組ゝ段十郎
容絵ゞ唐へ渡ゝて清ゝゞゝゝれゝゝゞ感ゝ
見ゝゝ市川団十郎ゝゝゝ力士ゝゝゝゝゝゝ
ある。其ゝゝゞ父の恩の中にゝゝゝゝゝゝゝ
二代目栢莚の射。宮ゝ延手中諸葛白岩ゝゝゝ
高唐人ゝ姑義の流草亭ゝゝゝ者ゞ白紋地へ
長くゝ文ゝ書て賜ゝゞ。恵く賞笑ゝゝゝ。

今も巻物中ても本市の馬馬が出て居る。ナニト
ちさまい者ぢや。絵へ絵へ足ぢろへ上ミ方役者の
及ばねとき。夫ふいろい癡呆。江戸産の女ぐ
京村の暮をはしり。上ミ方風ふ繋と結たと
ちんぢろいふ行ぐ乳ぐ。もれ絵へ。江戸産れい
つれひふ江戸風と押て。絵ぐ江戸子
ぢや絵へ。その流概中ハ江戸で渡世の生る者ぐ
りの二人も絵へ。見明る利屋ぐろさ。江戸子
くと云て。ぢもきくつきむだりぐ江戸子
ぢや絵へ。真ん江戸子といふりのハ生居ハ
ぢでもれる。ハテ市川流ハ目ざ多いさ。江戸
の芝居の中ちにこそる。コレハ役者名付の
三馬をこそ世人ハテもこぐ
江戸子ぢろ。ト
ちりのつき袖とひざの上へ
のせくめぐぎせる

上方の芝居好

ち後ハ江戸表に
逗留のひとく人ぐ
江戸者ハ
ちろ
体ろう

藤武が
居續の産数中ハ
ろ
ちの
ちたの
清水
弟仕家新屋中
文七ちとゆいとあと
新町ハ
ぢ
ふ
ぢれを
ぢ
ろ
ぢ
五ぢ
ろ
ぢ
ぢ
ぢ

去ねき日へどうぢぇい千三郎さん今れ先のんご後者
をアリヤ　なんぢや・的もをくふいわぢどれ・トキニちと
又せり合をちぢやうこい・今れてうるぢこれ仕方
もをらいでめいと侍ふはたくぐ・めりやまあねさび
のぢや・まこアをくふいをまのぢや・なんぢやとモウ
けさいのうるさ・トト　皇者もをんかい・こくあい形ぶ
ユたをうこい・一体ニアを敵で惣ハ神の きんりんぢやが
神門の藤尾の惣がをくを利ふ利でお法で笠六のを
代敵その涙が久能でせ法祝仁のをを・うまいりん
ぢや・悪い限をぢやが大まふ仕あやせと・ア！　白をま
の念仏協ぢをいをりんぢまい・真物の白をまを不侵
をくんが・あのよるりんぢをうこい・家初ハ八字を底
つれて土祢まありれ〻〻返・二度目の知がこうどうて
ふそかあとさ分ちち・切ふ蔭屋根のあとをうそ
出そい〻正ハ結ふ源こを涙を紀て・見どりがちどろ

りどうの身あんぢい・ひめこ笑・まぢらまいりん
ぢや・二度の出這入が三色ふかうこぢやあいふ芝
ひうこちりハうん切者どうぐ来てぢをうぐ二度あの
りりあ青田ふいうを上まをるをとじめそちうこ・
ヤナニ青田うい・四郎地でぢんぢやうちいふ者を上でを
青田とふいの・あの責今仏の稲ひとりの稲が
浜町や文義どんいわうて・ふて・鶴亀の秋仁ヤ
久四郎どん今の政を来ぢ・西東ラごろちや
ふりちいんご復ぢや・イヤまうこ浄瑠璃がをうぐ
いとふうこら李冠ぢや・李冠とを嵐吉が
こうちや・ア的ぐを涙をうこをこのを・トト一本
法ぢやぐを・　もをうんめぢを見ぢこ
やを・ト有田県の正を語り出をとを足物が耳流
をて自行とひづをり・代ハ芳的ぐを法を命出こ
をり・ヤをづんぐ・ヤモをづんぐをのと・明六を往でを

場ぐるい。三十日もさきうへいひ込んと場ぐみれん
さう。先繰延番ぐるぢや。なんでもまあ
相場と一年なもの打つづけさうへ沢ぐみぢや。ほの
なんまのるもちや。ちと一年へ
なんまのるもちや。ちと一年へ
うとひとてなる年ときうと後いさ。コリヤモウ掛
直のない西ぢや。なんのいい実のるもちや。半年と云
うぐ掛直なくうぐ三割こうふんくぐ紙いいのうくく
こちらくるくと片岡はめちで今へ大立者ぢや。江戸
なくふ産沢様といふなうくるんぢやうぐ。イヤ又今の
三五郎といふたら。ぢらうよまる戦ふぢや。なんの
かのこふても立役の本玉ぢや。琴責て一ぐん流
役の撥沢六郎せうといふて。根うらつまくふね役
なんて居て。までまんまと仕打てうせるのい湯ふ丹
利そ日ない男で。そ湯の利くるもとふくふ。ト役者ふ
うまれつのこのぢや。ぢ様まうとふくく来せうこうちや。

うんぢも居る上方者めかめてうんせそうのふ
虚いうそ仏ふせうぐこいのまぐさめちふ。ア中山文五郎
といふぐあるぐ的ぐあり。あひしい役者ぢらう面白い
ひしなど天晴貴ぢや。新ぐさ沢面白い
むぐ上のま打といふたくふ勇ふいりのまづ一社
の役者へ送り物とそろへこちと同じるもぢやぐみ
トトなる。その歌とうるとせ芝居側へ連中の下さ
を絵提灯をぐくふやとうけ並て。サア仕舞ぐ踊て
一合せがあるとさうあぐくの文句ふ合せて拍子木
と面白うるうぢや。大ぐかるしのあるるもちや。ま
享保五年からはじまるこぐ無濃連中。それ
享保九年に始るぐ大ぐま連中。明和七年ら
ぐ蔵石。安永に手ぐらぐ花五連中ぢやぐ外
ぐまぐこアぐとのれど。まぐ仕四組ぐ五ぢや。れさ
くの真ぐ連ぐ投ぐ市ぐ。拍子ぐ拍子ぐ拍子ぐ。

ひとう打ます世うヨイく・ま一つもよ・ヨイく・
いろそこ度・ヲシヤシヤシノシヤン・トモをくい
楽まするりんぢや・ハテ何のいそも
上ゞやらの・一辺上って
ゑさまれどうるいるりんぢやう・
てアあわゝしいわどたづむらい・
トトわう手味の能さが
たまふんわらの・風味の能さが
トイセ舞の居のくさこと入ゝ
たまとつのぞたくりく

森田

元江戸三芝居 客者評判記巻之中
江戸 式亭三馬戯作

巻頭 極上上吉

立役之部

昊貢定連 英雄

乃元曰 聆隆新録に曰、顯貢其形龜に似たり。好で重たを負ふと云云。字義我が力を拓し力を助くと例て、これ別に昊貢と文字の本源なり。四民昊貢の力によりて家を立て家を興へ名を後世に伝ふるの本なり。別して伝説の力に昊貢なる字を用ひたる等しく昊物に昊貢をかけて、子孫より在所ふ至り、家財をいとめ、其余波諸国に及ぶと。

ひご 伊呂波字類抄曰、貴字を書して曰、蓋樹の反語冊に用ふる。居合を接て而后ふもはさきい。

大ぜい 中日 乃元 東西く、拔は昊貢はかたとあらとえ

名別のお達先小ま初とまぢれ、義が達者ちやと
いつれても、出世せぢふ田舎あるとるのわり、又
名人上すと十同けれ、ふ所あり、ても、昌貞ぶ十指の
指ねべ、ひ、ろく、ち拍ふ果るめ、ぢ、年に病ひと業
さ、ぬ、ろ、ぶ、ぢ、ぬ、ぢ、と、ち、ち、ぬ、ぢ、ぬ、ぢ、ぬ、ぢ

宗論とゞめれば、誓結果でゝ小賢つゞり上て、後来
長員れ境論扱ひ人の這入る往ゝこゞふかる押
問答ふ果て面く、俗失とすりて絶交とこうぐ
傷者もめれば、と投さとふ医者もあり、今ゝ
いとまめくしう公ゝとびてかゝみゐも刑ゝ
あくりしもゝこゝみ面くりあくるぎゝだのことあく
がひてよりまゝりもたくまくりをゝみゞいまら
した和学者もめれば、豊若系れ中村堂と、ゝとゝ
の風れふまゝ町の評判を小男兼の八ゞれ法耳
ふり立てきにゆせとゝとかゝふゝふ汚雅双樹の
末接町と長参る佛者もめり、義絶と古風ふ生る
爺さ図、雷れ絹ゝと俗ふ安らゝもゝ連中小盲
めとふ悪態れ序問ゝら、横ふ同のめる鱶見物、
作達ふ附ゝる仏ゝ西ゝを入る仏ゝ知ゝと云ゝのゝゞ
経ゝ、和睦のいゝこゝ法白、欧ゞうゝめびゝうゝん、

南ゝ金ゝ酒ゝ井ゝ五合、神ゝ体の乎ゝに信仰の籠り、
紙ゝ言ゝ ゝ ゝ

めの男まつりの見物員の多いあると思へば感心
あまり。ほりくしらず。ほら貝。洞志國。室の見物員の
りうでなれと行側れ。橋の上れ。神なを加。文あるすべね
連中ばかりと思へば。見物員ばかりの。賑ハさまとなりて。綺麗
気合ばかりとそ。世話でも。ふい世れ人並。その息ぶ
めづらしめづらして。賑の天上馬の。ほら。主者あり。主
そろへ。見物の。陰でいあるまいう。すんだり右
のお長者さまでも。芝居。燈ひ。紅者。ふ。ごでい
侍のあらねせんさく。（あり自慢の男）ヲットまちまへ。お。網の中
でいござるぶ。馬の。ほら。主者とあつ。あれど。馬役
と。勝る者。八者。流。でいふ。あれ。者役とり。て
表の。（ひ自）て。長。いきう。芝居の。流の。ほ。ふり
ませれで。芝。ほ。ね。完さ。ぶ。い。芝。用。く。極
見。今。も。後の。ま。り。表角。一人。も。見物員の。多。い。ぶ
福。出。世の。門。口。後者。ふ。れ。ば。芝居。も。は。別。て

近。ま。ら。芝。の。ち。づ。こ（大せい）さ。て。も。き。ろ。い。見物員
連。の。お。ま。ぶ。ら。く。

●ひいきくれかけ合

●きのふ。ひ。ま。ふ。り。と。さ。い。ろ。ひ。お。ま。ぶ。ね。と。ま。て。ま。ら。け。こ
ぶ。ま。る。ま。ど。て。芝。勝。ハ。上。ま。ど。ま。ら。の。ま。ま。ひ。の。ま。の。ま。の。ま

貝賀遺中おのの美こ画像ハいゑありて絵と
ちゝさゞもあれハたゞひゝ貝賀とあり そゝ図く

「まあ〳〵
もれがつゝをきろ〳〵
ハテあゝがゐんと
いろ〳〵が
たゝ〳〵ハ
もゝんさ

もゝのゞ
もゝんのゞよ

の〳〵
あゝ書生
たゞひゝよ
師の高松と
あゝ〳〵
ゝれバ
ゝ〳〵
和睦を
〳〵の〳〵
ゝ〳〵
ゝ〳〵
一ゝ首

「うんゐや〳〵
あゝのゞ
もゝんゞ
ハテせゝんの
人さゐゐみ
きゝつく
ゝきゝ

師匠
貝賀の
論
語
讀

其
あゝゝや
君子
ゝゝん

三馬

「それ
ゝゝゝを
ゝゝゝゐ
ゝゝゝゐ
ゝゝゝゐ
ゝゝゝゐ
ゝゝゝゐ
ゝゝゝゐ
ゝゝゝゐ

遠めがねのやうにつもおぼ仕打ぢ●そりやあれと
るのよりもおぼ仕打をとれば、おぼ仕打さ。▲それでも
歯医者さまとるたびに遠ぶぜ●それに歯医者さまは眼
のさ好の江戸仕打をいひから紋切形といふのが
あつてもおぼ仕打をおぼ仕打をつもりせてまづ家
の中の江戸仕打の模様と
さるのぢ▲梅ぢら根ぢら長ふ縮ぐさとる蔓ふ仕打
のかつらでさる事もめるぶおぼことをとる位ら。
一度ぢたべのとつたぢもつ●さうしつくまつて
かるつ縮ぐつたてもうんめきねぢ上すは流ぢ。
きたびゆめぢとれば郭さいつも初言の仕打そ
されと古ぶゆも流ぢ遠ぢ。アノ八さ傍ぢとることと
いつたでもおもつぶ紙のの位ふおーれきく新ふあ
めぐりとふふむたそれよき首をイとをつて
ゆうんぢ西ぢらなぢ根ぢとるくとおりひーね。

かつてうぬらにたちられろ。といひぶら頭ど切て
ぶるくとと白眼八名の形ぢ面のやうで。どどと
たつぷり自形と大きくたる形ぢ上すれ業ぢ。
たぶ三傍ひどハつぶぶく大きくたせやうどるら。
まんぢら牧手れやうだ。八さ傍ハりちまで大きく
たたるのさ▲コウ。めんまの八さ傍でりあるさん
みぶメブ巳いもいらハたぶ三傍ぶら低より巳巳負
ぶ。たぶ三傍と寸すてハ大きいのるハのでハ後。
めれ八別者ぢおぼ巳大借でも。山義ふ登ぶて友
ねぢ刀と左へ拾弱て。トちまはて右打清紙実
法でおぼ巳ぶぶられたたハ大きのぜ。又遠ぶちこりハだ。
下形ぶよ巳歌ぶよ巳。家ぶ中ぢ刀打流ぶゆぶ出ぶる安
歌ぶよ巳●まハ三傍も巳ぶ中。下形の紙ことハ
三ん分の東新歌ハぶぶ流ぶるもさ。りて表三傍
でよ巳。家ぶ中ぢ刀打安歌ハ江戸流絵歌でよ巳。

それゆえ家のくからく八三情がさいかを仕て幾人も世世
たゝきられ絶へ▲まいたゝき無用もあるべきゝへ
ぐさい花を仕て幾人も出世したゝき三情へ同様らい
そと動のそ趣子ふ遠写ぐ極へ々れど八三情がさう
ハ初め●ハテ八三情へ動く所でい動くそれへ
一枝あいられ絶へたゝき三情へこせくもせ
はいそ獨考ぐ家之世帯とものとれす亭ゐ
も女房も子供も不女もそれ一人でかき足さうとする
極ぐぶ八三情が義ハ又名がゞ子まわ考へとゐぐ
いどにこいるみと▲たそたゝき三情も上手ぐあの
まゝ身の程いとゝゐ●めれハかゐひぐ所ぐ
▲そんゐ八三情ハ曲馬ぐ●ナニサいゝて無く云
ても化ぐ業部極へ八三情が上ゐハ皆まゐてたゐ
▲ハテたゝき三情が上手ハ皆まゐてたゐハる●八三情ぐ
絶よ▲たゝ弟三情が絶よ●八三情く▲たゝ三情
く●八三情ハ在今三郷大極上上ハ上臣は考ぐ
▲たゝき三情ハ在今三郷大極上く此うへ臣の行考ぐ
●八三情いこ在今ゐ大極く上く吉凶仮考花
ぐ▲たゝき三情ハぐゐと押て在今三郷大極く
上く吉の●ナニサく八三情大明神ぐ▲イヨく
たゝき三情く〳〵●八三情〳〳〳〳▲たゝ三情
●八三情▲たゝ三情〳〳〳〳
●八三情

注目 アイとふぐき返回ア いとふい江戸ちまれの女の子通例のことゝ

はあのふたりとゝひとりあどみゐまれば

○娘の子ひいきぐのかけ合

△

○お孫さんあのゐまへだれがひいきぐゐ合ゐとこと
私ハ子あのゐひとん助がいち絶ハよ▲ぐれゐ一遍
ひいきぐよ○ゐちゝぱゐん助ゐ仕てお手きん誹
が絶○ゐちゝ三ハち安人の助がゐ●あのゐモウ〳〵ひいき
ぐ〳〵ハゐイぐゐ〳〳〳〳ゐ〳〳〳〳ぐゐもゐ〳〳〳〳合ゐく
もぐ絶ハち安人のかハふひいきゐ後考ぐよ●ぐあの合

女のすがた見貫

見貫さん

おくらひ

くの

娼妓

ちちやりぶいろ

よ〜

おてんど

も

ら〜

さん人芝全交

サン 柳交

者をひいきにおもはせぶりの中仕合〇イヤ助ふ中仕合〇イヤうつちい
ぶ中ぶりえんぶりこそあけいきぢよおまへ今度の芝居とお
ア〇ハアさんまさ〇それおまへちやんの思ひ茶縮緬ト
錦地や中遠天鵞絨や赤ばらうどや、そこてかくふか上
下やまあ稽やまあ烏帽子やまあ。紙こもくうつくしい
衣いたんと思てそこてめのう。やすのう。白粉とたん
と付て寄寄やんて出るからう紙ともくつぞん紙よ。
ひよんぬくもまつくあるうぞらう月代ともくそんをして。
髪結といへばもうくくきよひとめくくぶつ
け不亦乱雲と思て出るよ〜ヨヤ〜おまへさんのぶつ
まつのやいもこひぶれいぶれいよめのうぶくぶよのいうぶ
こうまんぶ。ト。てもうぞんぶそうおまぶのどちやんの所
ぶつでもめんまきこまいぶ花とまつぶがあまきまと〇ア
牡丹でいまつよめれい芝居とうまぶよちやんの所
わんさ夜と思ときとぶぶらません〜イヤ〜おまへ

とおもそでゐいのりまァと。○イエ。ごぎのません〳〵。ぴょん助
もはふ社衣と云るのさいつる申伯母さんのお宿りの
の附ァ上ほしゝ其附いふ。ぴょん助が屋根でゞ。女房やゝ。
赤ゝつゝゝゝ人や仮用ゝ海借おつれて。ぜてゝ。おとそゝ。
お姫さまと。お傍と。赤い新の人と。お紐ほしと。考ゝ
人と。皆が踊ほしさ。てゝ。おつゝさんも伯母さんも
いつも参ごよ。ァ。わんとうに。家う今ぢやァ。宿
よりも。ぴょん助が紐とお云ひざりのゝ。○イエ
つゝちのおとゝさんいつ。ちゃんの助ハ注より紐いが。
ぴょん助ハ悪いとお云ひざよ。〳〵イエ。つゝち
のおとゝさんハぴょん助が紐とお云ひざ。お母
れおとゝさんより。つゝちのおとゝさんハ
いゝら。つゝちのおとゝさんのいふことが実
ざよ。○ナァニ。おまへのおとゝさんより。つゝ
おとゝさんハ大きいから。つゝ。このおとゝさんのが実

でございまァと〳〵イエ。そざよ。○イエ。おまへ
のがうそざよ〳〵ナァニ。うそぢやゝざいませんぞ。
おまへの小ぶしおとゝさんハちゃんの助とちがうゝ。
○ァ。そつてゐるよ。まざらまのゝ。つゝ。この間へ
ちゃんの助がうまるよ。て。おまへの小ぢやゝぴょん助
ハそつてゐるゝ〳〵。そつゝ。極ぐ。そうちのうちも
ぴょん助がうまるのさ。お正月ゐるとゝ。お上下
ちゃんと。まつ。○〳〵。そざやァ
ないよ。おまへ。そうそ。ぼきざ。○ナァニ。おまへがうそ
つきざ〳〵イ。エ。おまへが。○ナァニ。おまへざよ〳〵。おまへ
がうそつきざ。おまへが。紐とおゝ云ひでも。ぴょん助が
一ぢんざよ。○イ。エ。ちゃんの助さ〳〵ナァニ。ぴょん助さ
○そんなうもまへとハ。ぐ。ぴょん〳〵。ぐ。ない
でもよのさちゃんの助のちうふ系。ぎ。極
とひきちゃるゝ。つゝちゃんぢきだよ。ぴょん助

ごしいきまら・ろちまわさだ・ゆのさ△てんぐ
生れわびさりのさ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ
をるんおさる・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ
△アイサ・ろちもぴょう・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ
それい・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ

これも男の子供のあそび
ひいきのあそび拍子あり

▲■● いこづくしのひいきぐのうけ合
●ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・ゆ・

二人ハ捕人ホラ紙ハ傘ガ紙ハ傘ガ紙ハ魔拂ノ頭ハ
圖扇ア赤ガ紙ハ傘ガ紙ハ赤ガ紙ハ傘ガ紙ハ赤ガ紙ハ傘ガ紙ハ

孫陀五郎だら紙▲おれハ釈迦をつだくだ紙

●ナニノ釈迦をつハ孫陀五郎の弟子だら

弱い孫陀五郎ハ強いよりつように強いけれも

勇を仕さア。かうぎと中ッぴらで大勢がとり囲

てゐんでも活ッちやァ往へ▲エ孫陀五郎ぶ強い

ても。谷風ハかゐるひ安せん釈迦右衛門ハ谷風ハも

強ハ■仏強ッりんゝ▲勝往くでさ●谷風ぶ強く

ても。天狗さゐハかゐら往く▲天狗さゐぶ強く

ても。雷さゐハかゐら往く■雷さまも雷をふ

おいらゐハ往へよ●雷をゆでも大地おいかゐい

往へ▲おめへゐんでさうゑても。ふ盗雄さゐハ

かゐハ往へおめへさらう。天王さゐ比叡小ふ町の

紅燈お出ら▲ナニく。ふ盗雄さゐ云て兵衛

ぶ出てかゐゐる拍ろ▲兵衛さうて。今射ぶ出て

かゐゐ拍ろ●そりやァ結慶さ▲十二今時さ

■コウく今きんも強ざんも。そりやァそうゐハ兵衛

と今射ニ人と国十郎ハけらどうちぶ

活ゐらうのう。

極上上吉　切落　芝居好　執心

利益男　乃ゑどの一寸聴さんとぶわ。芝居好と昌貧

連とハおもしろゐ。ぶ別ハかゐゐことぶわ。ゐら白

極上上吉ッたぶ。いらけだや　乃ゑ　されぞ。ゐり

来。仏ゐのお弱れ。後のとく芝居好ゐら昌貧連ぶ出

ゐることれと思ハ彼れひいきとゐ。或ハ彩ニゐ拍

ニ彩の。又ハ切ッぷ人ッり。別合機ぶれ拍ゐ

せよ。ゐれ。ゐれかゐりゐを一度もかきざ仏ッ物ッきと。

まの芝居好とアて。昌貧連まのかゐらハ出仏て

ゐれども。仕打ハ捨別てゐり半。さぐて芝居好ゐ二度

居ゐぐれゐかさひゐぶ。後のよしあおかゐらぶ。

芝居ぶりさいくの仕さえどもあらう狂きゝ五度も
六度も出演されてかろうめ一度又えどゞとゝ
その年中はもちろんおとし見よりは長く長員連の
位おあり。やぐそ板の字も真っ黒おありまあらば
よりりつて芝居繁昌はまた一芝居好の狂歌で
くりまぞ

芝居好のくまさまぐくくりまでもあらも著述生来
あれとも紙数のあげきとゝとも来年の後篇まで
終りもさ升はいすしたる芝居好のくも

出ぬきこの日一日は浅草ゆかしの芝居みぶたのごとく。ぶんでも
ひとつぶよりだ。はくく数でだろうも絵今言ゴ。一イ。
二ウ。三イ。四ウ。五ウ。六ウ。ちゃごふちろで一万あらごえん
ごえびを達さ子。これらは山つぎは幕がおりろい
おりつけは浅ゴろ。一日の山ごゝとにいこれでこゝ居
ゴ又のぞ花ふまほとゝふふおりく傑の芝居とゝて
ゆるゴあつちハ今暮だゝら幕は内ふちろうり

芝居好

○ちろうの芝居ぶりまくけりふ
ちろくの芝居ぶりあて一まく
ろくくの

菓子よ
茶よ
皆年寄れ
菓の角ふ
うまく酒と
てくく奇あくくま奇

三亭五蘭

すまして、ゑぜこんなふ芝居ぶをしようとしぶ亂
で、すぐ去れ行へおまへもおとをとろ・ヱ・ハテよく仰さ
者もあるりんぶ・宮う謙とごらうじごらうまざら・一日
に絶ぐう人からるくらぶつぶとらぶをとかるくへ
行へ・ひつちも・こりちも・入へ等ぶごらう（十三幕
ぶあらと・ホイくそれいひぶらるるや。

モシどうもゆつくりとお出うせへ。

真上上吉　見　功　者　湘漣

[illegible]日　又切者ゆへ狂言見と役者見の差別あり。
狂言見ハ又切者ハ大名頭小名頭迄付の出かと
狂言方のは頭まぶ・ぶふ藁・役字をハ
浮りハ狂言ゆゑ出らくゆゑと場あり・板唐幕
大詰まぶ・一日ハ・又一弥の親同今きと伝くねと
の善悪・初中後と結見し・役場と場場の差別

中途ふ不消ると中途ふら生ずるの用捨ハ
考へ・ぶふぶ・ハ者ハ雑を捨ぶと狂言ふ非と
らぶと・候のつくとつかちハ・と立ずるとの高
拙ハ・ぶ・ぶ獨中に居・て・ぶぶ・て・海彼せぶると生
のと切者狂言ハとハはまる　九字を好じく　ふるわど
ふふ名のいふて通り・狂言ハ・ハ・ハ・ハ・ハ・ハ・ハ・ハ・ハ
ハ狂言と味ふて・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ
ハ者ハ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ
ゆ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ
る雑方ぶや・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ
ふふもぶや・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ
大ぶハ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ
奥州ぶふ大ぶふ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ
ハの字と・ぶふ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ
ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ・ぶ

ねたいの仮宅なれど道でいと弁とおくたづひへ
いとねと遠くて遠くなるの法で行き方おのく者
はそこうるぐらも俗ふとあまくやそとの尼ものそ
めるの或ハ後者の尼を遠ク俗ハ俗ハ
ちやまとまとまと同から非ところハ俗ハ某に向つて
へしまれ某の助言をとこと〜〜〜

相對ふるされと立ち後者れ意ふつれまいとふつて我ちふ氣と求るゆゑ実方人間性と敵て。
花方人猶ふ猿にうる始ち。花ハ実教ふ元ゆゑ。
能く人道の魂と弄家源へ引寄れど惜いうる
初意ふ言まり色実方ハ人間の性教ふ元れも。
能く味つそさんるとたべものぶら甘味ありと
粗気ちろりと言まりゆりはと強ぶ。花かこと
生ものの能きく人ゆそ。訓源てうまでゆ能きゆるグ
ごとく。実方ハ生相の悪きく人ゆそ。訓るに元こと
ぶひとはきるにゆう利めりて非ふ義ふふ
等く。言弄妓ハ場氣の器ふれハ。実ハ義く毒
花めるとゆ好と。擺淫淫理ハ陰氣ふ属ちる始
言れハ実とのてゆとぶを猶まりとと名うト
ちハ。花実相對ふ難いゆふれ浮でござんてゆる
がら花ちり能いでふけれど。結の場ゆで今り

半。さもれハ役者もものごとく。花実お對と名人
ちゆ上ゆ言ゆよせぶゆ。未熟のゆふ実ゆりち。
藝さとく出世ゆきりのゆそ。ゆそり花方と行
要。故又切者れ上ゆそ。同能と元教ゆ。実と結ぶ
ゆ。花ゆ言りとゆぶて言まるゆり。コレく
乃元ハ清井の通ゆ居ことゆ。乗ゆ。実
の乃藤釈。花実に落てことゆ。また。千ト氣と人
てゆしいことゆいりゆれ。半ゆ実方で敵い
ぞや。乃元。これいちゆ。能ゆ色ぶりゆ利屈とゆと。
家ゆ洗ゆ入ゆる。教ゆ元ゆそ元切者の強変。
ゆ河ゆゆ目ゆかける者で今れど。只今性者ゆ
花実のことゆ。人ゆ對座のゆゆ。ゆ氣ゆ
めりると悔りまして。足ゆ強ゆ。ゆ
天ぜの。ゆイとゆゆ。切者ゆ色。実手ゆ
ゆりゆぶ。イョ乃元ゆ通り者く。

上上吉

せき　居通　寒鑿

乃元 年中に芝居を立て通して、二階に登り組ん
だ。芝居茶屋にはあとでさべて来たその
の者ばかりづれ笑く。就く人は和して已に成るべ
きふね風して情に通じ、今をたのみて家を破ること
今をつうるどして生業あとよそれど芝居に古実
に通じて役者の若衆を買ると芝居通といふ
傳考ら たとひ二階に招ぎどといふとも若衆と
ある者は我に和して これを芝居通といふ
トに流されて 河原 かはら 向の人 さきうく
通とは第一に通とるといふ故に宝暦の比
まで通り者と呼ばれ 通人と
称して大通人又は大通といふ
南鮒の通とでうて百もの業組 いろど 百も

仕業知でも仕合せ悪きことあだと業組のたびに
お坂ときろ組べるね 乃元 これはきろいふて
いついでものるとハしやくたいもない

上上吉 金五夏 訳 知 通情

乃元 仕打は芝居通に似て小く異なるこの
これをつけきりこやと勿論芝居通に上ること
はまづ近うムスビ口と白くいとしまた此お
二人と後姿に更に河岸と添て後に入る
たうは人り本が芝居に穿とやさねばならだ
きろる附は義理にさろりて他の浮利はさるべ
ふるりきるゆえ仕ふるは各番斗りでまぐく
年まとはこれ年 うぐら好 コレ 既に どう 麻病
ふるりさうぢやせあてはならでも推てこれなら
老巧の人 イヤく これはいろくぐらう あまて

お逢なさるゝ。乃丸 作の通り。ゑんの心在ゞ仏り
まをう。お藤せヤたくてなりませねど。ゞ乃丸
の幸抱まゞ。評ふかうまをう。東西〳〵。

上上吉

役者きどころ

好男

乃丸 色る師のかるもで色生まゞ。濃る師ゝ
で。ゞめゞて居らるゝ。役者きまゝ。ゝ家の二藝
ことの葉ねゝ コレく 役者きどりとゝ。ごりた利屋ぢや。
乃丸 これ別色男たるぶり。弱氣男。粧男。
茄子ゝ同色を付るゞれ男ぶりいるゝ。
師ふ奥とゝ。奏色ふゝ。病のゝさる。
蕪屋。されど茶ゝ姫ゝ。ゝ員ゞ。
ろ。もも芸居ゝ。ゝ好ゝ。ゝまゝ。役者
で云ゝるゝ。ゝ。ゝ字ぢや。ホニ。正流の
世界ゝ。ゝ。ゝ美ゝ。ゝ。ゝ。ゝ男ゞ

まゝ。ゝ。ゝ。

蝶蝶
役者きどりの
色ふくみ
古今事三集

早くうせそむこれ　役者のくさもおもわるけ
本。京紅花ゆかのあわりけるい銀糸織ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
打の紅絹ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
紅雪ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

あきれらァ。ハテ。ア。恵様子が内らら女ゴ抱くと
こんなころ。さらば迷いせてやらう。トまつたぐふ
まぎ。ふぐふぐふとこんなれば。ばかしの。のらちんちくちくちくらの俗利。あきやァゴん古いおとし
性と正でこんな女つき。めんまり智恵ゴ絞へ。ハテ
すまこどく。紙屋のかくこ名物も手流行ね
遅れと女ゴ。ちくも異國法ふみこまづらう。
ナニカ。母れた女ごく。あまこかけるべ川と茶くう。
いづ豆兼顕ハ。ちくん辺婦。ア。嫌ゆくいス。エヘどうだ
こんてくれ。おれゴ方ゴよくつやど男ハよくらう。本
当いゴ。病だろう。自惚子ハ。ちゴ白くて十七組
もかくして。ゴ。豆絵の猿。ときて。目鼻ゴ
一所へ寄屋くくらとさほふ。極へス。そりやこそ
ふり返てこんさうくそうるふりんこと。
で。虫打ゴ。ちれらァ。ヤマりう。茶屋へすまゴ。サく
これくら。桟敷中の女ゴ。弁当ハんぞにあれ牛り

こんるこどごらう。ちろし。見も切徳ふい。ア。猫れる
もとれる。すんぶんこれ。ふりゴ。
又スの四三日　▲　ゆ三人り連立てあるいたら。どうでも
ちくちく。居ゴ。するごらう。菊石ゴ。ピいのうね。惚
で。今松助の。まゴ。ちくいもりて。蒲井松の
松。ふう。焼付の。古枝。ふゴ。面相。毒ゴ。ア。にく
対ふりどして。あまで松助。やうくら。ゆうちあげ
絵。ヤく。笑ふいく。おいつたまくゴ。ゴ。愛で
一ぢん。居れの。多像ふを。ふんせてやらうゴ。ア。
筆石。ウェうね。ひとり。紙。まふつてこ。図で
ふいて。ゆの女ゴ。屁こも。ふりんこ。そりやァ
寝ふ。自惚とふ。色男。おいしまこと。ひりやく。
ふりゆうて。アレ。あれゴ。ゴ。エヘく。その。名の。泥
ふんゴ。筆石ゴ。色男ぶつても。目へ大粒。ふ。ゴ
出ずて。新へ。ふ。ちゴ。ぶけだくら。市仕廻の。焼鮒

とらふ面ご・ホイ・いつの間ぞふ・ふる茶やへまさが・ア
うるせく足ら中へ這入て・又女おこてふ見る後の
ヨヤ・ひふ者化物てまた後へ・フム・なむこがう
お宅佛く・

上上十　　桟敷たち　　好色

[ルビ元] 仮名乱ごつもあくて老体の多男・芝居
いんどふ・一日桟敷の方ばりときよろく見
流し・幕がちまるとあ板をあちこちぶ付
めるひ人の人の居る前の後とさ後よふのが桟敷
ちりまお家のねれるふ・ちりふ・小あるも大
めうりとるとごムり来・位付も上上の十代
るふ・おとしあの評判記[大ぜい]いふもヤヤで
ムルぞ[ルビ元]儲れ土方くいちやはいて客桟の皮
と投げふれ・夫よりあのこれ上とぶはれるから・

上桟敷ときつとうるる[ルビ元]是のとにあつ
さち縁と踏長して土間のうんちのあるはのから
めびせさゆ忘ちりの迎とるこ平八敷ご儲のあるで
めるさ[ルビ元]されども湯る所へ故役ふ打るく
役とうのとと忘れご中ッ板と座のじてうびきと
波され這く我土方へ飛込るまで祇西く・

[素の男] を付きせる煙草入を差したれど・素の
毒で取ふれれちりのれ[ルビ元]夫より方撲ふ
撲とかけて儲のくのあるる人陽り[ルビ元]又ちく
ヨてあいさ[ルビ元]大切ふいろ儲の土方れ脇ふ
孤しあられて・ねきと云て強して出らるこそ[大ぜい]
女ふかくまる東埔塞男・とるり代土風ぐも
感ふく・

●　桟敷ちり三人のかけ合

●アレく言る土方ぬ三ふ居る姫をうるとうこ・

▲ドレ〳〵今あのまんぢうをふろうかいさのそ。
むぐくどころでおるのろ●ナニ。あの隙よ。とこの。
とこ。の。あれさらう▲ムウとく。きまるくぎぎ
あんまり青いぜ●ひゝくさのんぢの▲おつちの
うづくぶいぢやア極う●そ。あつちもいきの
きざろさトいふ面ぢあんまり新が長いく。
▲四畳ふいふ極へうの。ハテまつとりんぢをあ
東の上桟敷だ。アこ。あつちゝと眺てお弁当と
たべるるゆちぢまとんま●ドレ〳〵▲髪こうさ
く。あれうまりとと。りや。ム通りのアこく上よ。
●ハテ。ハテ。あの生糸の新ぢ坊さのそのふ
むせられ襟ぢろ。ろ。ろ。

こそも山家そぶち・おそ牙ゴ[illegible]りに立せうといふ
貧ハ[illegible]ねく　ヨリト　めるもく、
トふりかくるさんふ藏の土間の
娘と新七足合せるこいつとんざ
ふうふいきあつりのゆゑ
あつにだまつてえりんたくろひ
「卍へンく」
○山鳥子大引長い幕ざの

宮者評判記巻之中畢

木林田

花江戸三芝居宮者評判記巻之下

江戸　式亭三馬戯作

上上吉　座　顕　員　偏頭

[illegible]をたびくしかりの狂言ふ善悪あるもぞ
の是分ぞ。おれハ堺町昌員。おれハ葺屋町昌員。
おれハ木挽町ひいきといふ。なんでもかでもつぶ
昌員とる芝居だろうと浪花後者あるも狂言
あるもかもぞ。芝居社と昌員ふハ所昌員
おいるもまぢよく情のこゝろをなれるこ。外の芝居
いふりばいでもつてとふ堅ひいき幼のきく
代く歌舞伎流芝居ハ源町中村座。元祖ふ移れ
ひとをくゆとふ店結決もめるまい　ひいき　コレ
ひしハ菁屋町昌員ぢやご　ひいき　コリヤく。ヒしハ
木挽町ぢやけれど。畢九もたり方で　ひいき　サ。

ひらもあたや町の芝居ばあうんと能と一の
富でも名つく事なる仏のうち（ひいき）それいとの
堺町は芝負もおぼえこと。かの芝居いとぐれたとて。
もれい氣の毒ともそうな（ひいき）あれさこと。こら
とらもりそのの芝居はいぐるまねるのいお氣のどて慨
のわるぢや 乃名 東西く。それが別座は芝負と
やたりの。されどかとよるも芝負は一流。ちばね
繁昌は基めでたいく。

上上士 身振好 格別

上上士 聲色好 格外

乃名 分振好。女色好は女人は一番ふ評はもう
これは芝居執仏の内ある指別の拍ぞ。黒人
とよぐ〳〵流は分振師。女女連とゆて別座ふ
立ちはまれば藏者流。ちふ人それがうとも評

判のおとはと。仏義評ふ人くりまもんそ 能流
ニテ又分振好女色好と出さへいぐ 乃名 そと
が芝川でくり年。分振師女色連八道くぐ
ムルおよんでたとひまふ人でもまた人同能。これは藝
評にくりませね。分振女色好とふ
字が目はつけ不寛ふのくくり年。これは分振ぐ
好ぢやとそ。月待日待ふいさろれど。分振師も
めぐたる声色ふ好ぢやとそ。人ぜがまれ能
藝とやらるれど。女色連ふもゆぐたまぐ
好の芝能ふ物ふ遊山行家の座ぐ能く
ぜ分ぶもも。人物とうちぐたて分ぶり物まる孫。
あれは別藝師ふのは芝居 天竺 そんなら年
生のくぢやな 乃名 さ年うでくり年 さ野の ちれ八
又江戸年は分振師や女色連中は名と生て。
獨くの評とうぞよわどたのみくあれさ

[声色] そんなら二町まちや、生れの爰ゑ居ろひ、
藝者たいとりちも出されの [乃至] それへ連中
と中入りの出る浮くりませね [天竺] そんなら
平生れ藝浮きたのく [乃至] そんの集れ [声色]
何ぢ爲ゆ無清、とよどるなんが、浪世でもない
[対ぶり] 爰ゑ実ゑ入まして一寸芝居ゑ
も、爰色ゑ対振ゑと我ら号はてう分ゑと
ゆっとまが森くの横丁の割込小屋ゑ在て我
ちくまと新をーゑ、ゑ対どりき、弟蓋の役者
が目眼ばゆらと首と振まで同じゆうに首と振
で一ゑ乳対振と似せ、より一合ちまが濃の
人が言ま遠ちと思ゆ者ちまがど、又孔方のゑ人
へ毎日ゑ抱して声色ゑ対ゑ難いとゆゑや座
の方ゑ押合てこんる同高ゑ色の中に変の役者
は浪新ゑんるら、ゑ流ゑられ一ゑ入ばゑく

の踊れ [ひーもぎゆ] [するロ] ちねが屋ゑ食て作ちっちる者
いくねる、あんる後減ーもあるのぢや [声色連]
ゑんざいつが声ゑ出ちけもちゑ後でなんとを
つきやがるる、うねぶぶちうゑ面目ゑあら
が、坂ゑ薄をきのて高業者とゆるゆがど横
どっやられたりむられやが [天竺] そいくーどの出せ
く、 [声色] [ちゑん色男] われも爰ゑ連とよどるへ格別
はちひるひゆへ絶行が入ることまが完切へ
教くー稽古ーてあるくにも、西茂町の往来後さ
西をゆるんが上りゆのゑをゑ西で町方れ牧ゑ
裏所ーとれより表通りれ町くとつるひゆるれゆ
なれば已まちれ兵天新者を勤めゑ果へ二丁町
近辺いゆくー上達出世いくまれて、俗の推と成れ
へ新ゑ世の狭れ声ゑ大ゑ者ゑもいるるーちや
[カ乃至] それへ別ナ爰ゑ連中れ出世一代記ゑ西で

評しまゝとるハ老俳の声を好ゑ[illegible]でもない人の
蓋評。叔父夜色つゝしの癖も上方でハ解ル
かまへて。「上まゝとるゞ江岡我童でハ[illegible]本ゝと
いつそはゝひきまふと。ハそゝらでせい。トいふ
お寄すれ口癖。又江戸表ハ解とかまへて「序ふ出
まゝとるゞ岩井半四郎でござい。トいふ事でハ
はゝたゞ只今ハ解とゝ[illegible]で。軽をあふして素面
の出ぢゝひ「序ふ出まゝとるといふハ古風とゝ
だまゝそはゝひ出ゝもめり。杜若を一つと以ふ
めり。一す大和屋とばゝ[illegible]て出順をキッカケふ
ゝふゝとゝゝりまゝ[きてきまえ]はゝて幸ゝ
てゝ迎ゝきゝと淫ゝ附「ヨ助ゝる面ゝ[illegible]ゝ
悪くても蓋ねゝと。はゝゝ者ゞてれゝと。ア俳
いるい夜色と夜て居るも立切終へゝよ。兵
ふふ戸惑をもるいる[乃元]叔父[illegible]ハ[illegible]

笠の役不足ゝとゝふて八歩さんれゝるゝゝ。ゝん立
俄の商振小て為ゝとゝり。ひふのゞゝて熱役去
牙振仕方ゝ元自慢[つるに]芋蔓を二ふ疱結
ふて。後炮とゝん せ行飛へ風呂蓋とかゞせて爰
ゝと内ハ働きゞやゞ[illegible]ゝ中に油蓋ゞゝ
ゝとゝふゝいで。寄ゝも[illegible]ゝ
ゝまのゞく。[こせつき男]さゝれゞく。目かゞゝふの代ふ
ゝゝゞくゝと髪ゞ舟油で付て。ゝゝへかゞゝゝ
紙ゝれゞ。ひを切てギックリとふゝひゝゝん ふ先
牛ゝの火ゞ付てゝゝゝと扱かゝゝ。チリ〳〵と
めゝ牛ゝ中へ火ゞ移ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝても息
ゝ蓋ゞ。ゝゝも大きゝ焼痕てゝゝゝ[乃元]夫
ハ即席の四五ゝ[illegible]ゝゝ。ゝゝゝ一夜漬の杜若。ふ
ひゝゝゝ仕直ゝ附ハ本蔓で今ゝ本。扱又夜色
好ゝハ「まゞゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

めしての座付口上[ゴジ]引[ひき]ゐて声といこめ
とりはやしたれば、宮あておやめ[ゴロ]しい待ふござり
きりぶ、甚限なる義[ぎ]ふも、出[で]ぶ負[ま]けとり立
の[侍より]アヤ[ア]ほ[ほ]いそれ義[ぎ]まで出[で]ぶ
ほ上ぶや[ゴジ]まづまふ善[ぜん]したおさ[ゴロ]詞[ことば]
馬[ば]人めしてもめふ石九どりのあ[あ]ぶ[ぶ]
文句でお里ぶ[ぶ]ぶ[ぶ]れまぶる。まづ[ま]ぶ[ぶ]ところ牙拍[こびり]
夜叉[やしゃ]の紙[かみ]ぶ[ぶ]

▲牙ぶり好[ぎき]

出ぬき目ソレ牙拍とふりのぶ役者のくせをよく
呑[のん]こむぶ山ぶ。伊[い]ふまるでも復ぶ[ふく]ていれ
ホヨ一す茶麦[ちゃむぎ]とそれぶでもその公ぶ[こう]ぶ牛蒡[ごぼう]
麦[むぎ]をヨそりのをいべよ。牛蒡と氣[き]ぶ[ぶ]ぶ[ぶ]
ぶ言[いう]ぶ[ぶ]ぶ[ぶ]とはんぶ[ぶ]ぶ[ぶ]ぶ[ぶ]ぶ[ぶ]
ぶ[ぶ]ぶ[ぶ]ぶ[ぶ]

法ん坊とゝえるこてらゞ秘るゆゞ生活の坊へ西き
たけや。裾のひくゝゝぬ母うに公ゞけて出入をれゞ産
ぢと月とえる。それも又片目つゝをくゝ所ぐ
えゝ稲へと目をつゞらふ。ヨー。すてア月抜と住ろ
年うまら。こかうをると坂表がでる。ヨシカ。そこゝや
ろう母ると助言や。かうをると。こけ月ア世ても
ゝうらのや。所とゝういふ者が加賀色。ヲット。元
ゝ月ゝてまゝから出てゝろト坂。二海サ。コレ。ア稲へ
あゝ稲がとりゝぬかゞみゞをゝえるとゞうき
い稲へ。サアゝけいとせう。わとものでんまゞ母ゝ
ちけ稲へと茶だんの間ふのわゝゞ。ヨット
まちまゝ。コレ。あれが。トいふ者で六法抜てもゞ
ちう。コレ。まゝゞ。ヨシカ。そこゞおゝゝこゞゝ。ト
つゝむ。のこゝんゞう。コユデ。かゝゞ紙ゝうとゝる。ト
のゝりきりにとる。アレサ。おゝくとゝさうするゝら

まゞつゝるい。コリヤ。ゝんゝゝト。三ゞさゞつゞゝい
トゝゝる。こゝでゞウイゝわふむ。アサゝゞさうゞちア
ゝんえゞゝるいゝゝ。チョッ。のこゝちこのゝるい。

▲ 表ゝゝ好 ▲●かけ合

丑ねき三月

●「ゆゝべゝこ七と表情でかゞや浅村
西と知ゝゝゞ。お七がかゞやゝうねひとり紙氣で
ゝまゝゝだゝふけだぜ 注三日二表情とかけ合のこゝいろそゝゝ きゝせこゞ
尾張西もよゝゞど中だの▲ゝせゞゝのみこん
でも九で江戸洞ゞゝらいゝゝ稲へ象弱ゞゝ暴西
いめつゞゝうだ洞子ゞゝいゝ「玉の山ゞゝらゝく
ゝりで念仏ゞゝぜゝてまゝゝて居ゝトふとゝゝゝ
ゝうゞきゞ。モウ一人と稲へぜ●コウねゝやア。ア伝
ときゝゝゝうゝゝゝゝ田三助と▲うんゝゝや●きゝと
ゝんゝゝゝ。締有けまゝゞゞ暴話もなら稲へ
▲田三助へ沢渡ゞゝゝゝ。ゝゝと社ゝ住ゝゝア。ゝれゝ

中二階をいけくと居らァ。仙女ゆ今函考。
ぐるや富国を助万低。半一だんふ社若ぐり。
ッシテ五役を中ぐたくさんあるうらちゃぐ。
●今年の二十六枚ゆやァごう女のとあなと
ぎっくぐぜ。ぐぐッきり閉ぐいくッてゆてえ
られうんぐ。エ。人を馬鹿ゆさその若ぐァ。
蛍後で仮百人法ゆ五を孫人をの仮
▲人ぎられゆまると社今まうけぐコウきゆて
ぐぐりまぐ中だらうぐ。
「ホウやまう女のこころさ其方ゆ
忠義ゆめんで家譜相続いさせ
くわう必ぐめんどうちゃくちゃ
くちゃく。ア。ちゃ孫人。
●くちぐゆの内ハ社モウちゃとぐぐまぐ変ぢゃァ
出ゆぐ遠ふスト仕通ゆ先張ぐ長仮

○声色はやり古風れ俳

「モシ」ひさしくつるひまぬけ
ちゃごろのかんくとさろぷう
なまぬるいなまぬるあんまりもちろぷいう
つくつもわるまいもの少ちとひろ
ふるいい所のうち少ちとひろ

「ちひふふつる
あまわぐう
ちつもちの夜ハちんのやま
栄燻の壹く
次とちぐ

ちちちぐーの
柏の
うう
めつと
ひつめ
こくの
お団子
よりや
ちつやア
さつちる
イヨ
「今の幸四ちぐ
ごぜちまと
ちつ流りふ
ちるせ続ちつさま

「ちちぐ
きぐつちちる
「ふけくきあの
ちちちゆー
トツテツ チニツ トニ

○聲色の
聽衆

「ちて
あもちの肉がぬぐ
もちぐへく
ぐちともちぜく
ちぐちちく
あのきぐんで
いく肉がきちつく
ちて ぐちく
イヨ あちぐちつ
大和色ふ大和色
もちぐいく
声とけちむ肉ぐぬと
たちーやまちんぐぜ
沖よぐちのきーぐぐん
イヨ やまちとちり

上上　五番勝　のん左衛　癡呆

上上　行色者　鞍馬

乃元　のん左衛門は生勢のきゝ心を後悔へ出ま
ゝ。勿論でんぐうとのんを衛との名ちがへ。でんぐうよ
蔵様の平でやうまを。扨この平行色者の蔵様。
まゝ。生意気な者の指図をまゝごとかのちろ人
とび迄でーだんぶ丈井ろ〳〵平。それより別こと
様。成れ人ゐにしろひ。和されたとゞとさえだ。アそ
れを。同接をちゞて。一平ふりまをうこゝ
の上ゐ。ふ根性。かけ。ゐれ人も者とへいうまね
ゐ。まゝようろうとめのきろとれゞ。諸ろ。ふ。ゐく
ニ同接をちゞて我ひとり働ゞりをる平。芝居
のんゞろて大ゐふ。ふ。その為ひさられて忙らる。場。
大ゐく要〳〵涙出ふゆまをるゞ。

狂言を
のゝ
顔
吐
なり
あゝ
芝
居ハ
羽
左
衛門
りきぎ
徳亭三孝

りゝ物と
ゝ。ゐ
坐長貢ろ
ゝ
よろる

出ぬき日 枝黄のめふなるまるく〳〵アイモシラとしハ
九さらをひりとて。蔵ふまきをくふひけのへよく逸八
年たふ土方ゞ拾らゆりだ。今氏円樂としておなる
せ人蔵ふるさらハ安ニトいれ女ニを全体ちゆも六人
さでるるといけ三ごこれ九人の十人のと全き
られちやたまくゝ稲ゝ今まくゝ新と結るかうだ〜ヒ
がくと遊ゝるの氣のわゝ女ゝさ。絲上ふちゝぺさ
わるのて遊ゝるゝりを女ゝ後者もちゆくまうけふ実
を入女ニとゝき。ヲイトく〳〵稲ゝ撫〜ゝ。後物ゝ
ちゆくの振ゝきせる負ふゝ孫ゝ上茶碗ゝく〳〵
稲後者ゝ。コレく実ふゆゝさ。ゝ幕ゝ面白い今
ゆくゝ三茶屋場ゝ新きゝ三実ふきてゆ教ゝ遠勢
いゝぞゝくゝそうゝぞゝ社くゝとる帽ゝさらゝ女せ。
ヨヤ〜〜せゝ行ゝゝ。ゝリヤ〜〜女ゝさゝそゝイヨは上リゝ今れ
〜〜せ人道具ゝ勝つけの振ゝきゝくゝせゝ。アリヤ

二度目ゝくゝせゝ実でゝ幕ゝ出る後者が
義春と初春へゝ女ゝ。ハテナ。ゝう二度め
と行ゝうゝゝゝ。アリヤ後者ゝ。ゝ
ゝリヤ〜〜。四度目ふ弁当で打ゝ。アリヤゝ上
ゝ出ゝ〜〜。イヨは上リゝ。ゝちゝ稲ゝ
茶屋場ゝ稲ゝハハテナ三茶屋場の茶ゝ
ハハア茶屋場ハ貫ふゝ。ゝとゝ。幕ゝ
ゝ屋場ゝ実ゝ市蔵ゝ出ゝ
初幕ゝふくゝらゝゝ。ゝリヤ出ゝ。アレゝ
市蔵ゝちやゝわゝハハテ市蔵ゝ
〜〜ゝ。ゝ市蔵ゝちやゝ。ゝ
その代ゝふヨヤ〜〜これゝ遠ゝ
婦さんモシト俺ゝ店ゝ
土瓶ゝふゝ。ヨット実ゝ
義ゝらゝ。ゝヨイ先ゝ

ヨットにうら出るぜりや足のとく。チトお尻を
ロ元ゑさへ。トさんぬ。モシ御世話が解やしさ
もれが待んで是ろう。女もうし。チヤート行ろう茶屋をあとを
の。下駄は。脱くこだ。この紙でふきの。先だけのでご
さうさいふ。ゆご。ッリヤ熱物でごさいナント氣
が利くだらうご。別合のちろでおきひるとを
へ。身一お徒用ゑる男ご。

主役相巻軸

大上上吉

中ろ つんが機嫌はこれと立役の美男ぶり

幻郎ね 初番男 ちんが機嫌のこれをきくわど

ゑふふうくの機嫌でこれるくこ出きうまの

ちや 中ろ男 いやくきうでない機嫌へろれこ

人のこをゑさゑぐこ。機嫌ゆかくふねこと

ゑ。別くふ機嫌ゑきくにゑ及ぶまい。雷機嫌ゆ

雷機嫌の二役

廉直

ろぎんで出ってこれふ仕打がめるゆゑ仕打

傾者ひき人 これどもこれこそ。きけどもきこえど

うごけども其ゆちひ。ぐ。ぐと。滑つんが機嫌

のこれ物へ偶然にて。遠ろう。公ろう。義経立役

は美男でゆらうご。

役者揚幕

より出て義経くかるろ。新客もつれど。本

来者でさるろ。ゆゆちやゆらけごろふど。

折ふ高調子は役者。或ハ一調子ちろ上さ

附ごろ。ちくこと。耳くこれど。こごでの役

ハ一両さちもしれど。別て低い調子は役者。又ハ

ちりいれて声低の場ろごハ。ぬくこれこと

ろこそこれこもこれも同じ公ろ。ろまろ

こへると。ハ役のろ。差ろ。ごつと。辛抱役

さろ。ゑ。ゑ。よろこ氣の利れこれ。ゆ。ハ

俳ち。実ろれ。ハ。推量ふ。ふ。ふ。

きてたいく

▲ 本はき日 ●かけ合

▲ りたいこうこう〜コウ、

ぶ幕ふるつこら

ぶ幕屋へりてきて

とーてまようこう

おめ〜ら殿ら養国ふ

おらア角て矢者ら

で二合ときめよう。

矢者にとんにらりあとりふ矢者

居るそゆのひ人公出まるのびと出まるの

ある形神社小ゆる矢者

附ざ●附ざろーれてこそ、もらっこんなに

つのぞんさとが絵ざ八ぞ八年まで

りうせんだらぜひまくこうでんるのざ

だろくしい▲おらぞいつでも寝よ。ナニサ

どこでアそでも同ごとだってでんると

いろく小老ろざ子樂ろざふうい●そんなら

正ぜ行ろこ人る方ごろざ▲ナニサ〜

信長絵へこきアくアそ人ぞ仏ごろ

白い表紙で立てあるぜ●あれハ誰ぞ

▲正ゆうれいのごと。ア力。役者のゆうれいか

●さうさ▲ナゼ豆知この物語るとぶぜ

ゆうれい出ヨ来もこハいとんえさろ〜●ハテ、ちゃく

そこが役者ざ▲役者ハゆうれいと豆出で

たのくたゆうれいこ後ろ。ア。●ハテちゃくあめ

狂言ぎつね

▲ムウ、さうぢあらば又、やんとうかと、受けよう。
ぎうんそもわれとうけまうだの。アレこのいふてくるぞ。
ねぐらせうんふるくるぜおわるこんこん。あ、ぜいの。
だらう。をてのそばゐるゐる男いだれどもれ極
ぶうりうりをてあるの。●あの男共同ゐゆうんいぶ
えんえんねぶごらう。▲ナニうんえん極下。ハテワレ同ごの
ぶうごらさへアエるのゐそだにあてえん極くと
●ハ、ホヤよ。牧子ハ一世とうらうりうり食で代世このの
世とへどそくぶんざらそだにあてゐ同ゐえぶれ
ねとうふうけき。▲ハテ。その利屋牧子が一世でさへ
きうだ抱と。アハ、ゆうれいゐせごうらゐ行ごらう。
●ハ、〳〵。▲アレくゆうれいが居くきえるぜく。アレく
わちくうちさ。アモウちうと孫ちさ。首ト猫の尾ご
ちうとだうう。ハアきえさ。ヲヤく消えあるく極
たぜ。コウ。今のハ牧ぶうおらアどうも解せぬく食共

愛ちやう極くうぶらくあるうと同ゐゆうれいぶ。
いうくゐかるうぎとちうぜちうとうぶうりかや
の内へきうイと這入ぶうり。めれいゐでも修業所
うまて妻ちうひの幽霊ゐるうさのぶ。ヲヤく。ゆう
ひうる抱とさ上てゐるぶめれいうんぶらう。ゆ
のう即撓さ。ハテ。まあ孫ちうんぶらうまく。
▲めれ涙ぶぶ。あの下にうんぶかして有ぶらう
●さらまいもれ焼さのぶちやア極くう。▲ナニとんぶゐ
と。ふちうと宝物ぶらう。●アリやく。ゆうちうとく。
ゆとふうてもいうぶ極くが。ドロく〳〵くとゐまと。
カメリくと呉拍子ぶうきえる。ヲヤく。ゆり
がうやうアとふ〳〵んぶぜ。先刻ぶらきえさのハ
めれ一ぶが。あの男ぶのびさいちうんそゐんぶ
から。宝ぶ物ぶまと食付さゐ遠行くい。

イヨ役者アリ。

▲ 親仁形之紹

年代記

切上上吉

古實者

記憶

乃元 江戸大芝居のはじまり。寛永年中より凡百八十年すぎてとぞ。日記をさぐり。秘書を考へ。ゆゑに閑記されば。なほの因ハ芝居ともいふべき老人世の流行とゆゑ。当時の役者と謂ひ。さだめしの役者をあまたぶで。名人上手仙伯の一代咄役者仕うちれ名題。狂言の高性。万ゑこれ一ッもふねとるきと。古実者よの一藝 名き男

そのかりに一寸と聽うとされば。ひくふ技をあらぬ。長ぶ。ふ。ふ。と退屈 乃元 近松ぶ浄瑠璃本ハ名文などを切ぬきふ。ふ。ふ。江戸式義仕ハ作者ふ。ふ。ふ。中にもほ行治蔵中村伝七。茂本斗文・堀織茶吸純通ふ。ふ。ふ。古人

ハ名題ゆ。今ハ中村重助。浅山金八。生駒田治助。光の源川如皐。などの数。ふ。ふ。ふ。る役者。南り紅ふ。ふ。ふ。ぬ。ふ。ふ。ふ

おもひ出ぐさ巻目

一 戸ノ[illegible]ぐ後者の宗旨寺[illegible]名法名[illegible]
へ元祖寿年退[illegible]なる二代目相続ぐ父の恩と
いふ義[illegible]集め二冊物と板行て[illegible]遠[illegible]
中間化[illegible]えふぐ[illegible]たとぐ[illegible]中ふ
とぐ故人の法名宗旨寺[illegible]
[illegible]元禄十七年[illegible]享保十四年までの間亡人
七十餘人の年月日付[illegible]
[illegible]享保九年辰年[illegible]安永年中までの古人と
[illegible]の恩[illegible]
名[illegible]草といふ[illegible]
[illegible]千[illegible]作[illegible]
の小冊[illegible]考家[illegible]
其跡と追て出[illegible]
まんぐんぐ探[illegible]
さ[illegible]考[illegible]

[illegible]水滸[illegible]
仕打のある間にも紬[illegible]
いふ[illegible]実の[illegible]
と言る今[illegible]
どうも[illegible]初日に[illegible]
紬を[illegible]今[illegible]
衣装[illegible]
[illegible]の協ふ[illegible]
[illegible]
の語を指く狂言[illegible]
江戸中[illegible]
[illegible]の人[illegible]
遠[illegible]
[illegible]狂言別江戸の[illegible]

笠を被て竹杖を突て浄瑠璃に惚てさとめ
ナシトきついりんぐ子。スリヤコレ。附の物を方。是一ツハ
脇差の大小柄。それなら者ふびんなれ。
の縫ぐるみ小袖を打ち姫ちとふふ世俗の得りと。
袖しきちぎりて二百文と文句ふもそれ公く
元祖脇差の各参といふのふりのごらう。扨又市川
流の者ぐるいといふのハ元祖十七年ハ姫さと
ぐる。其ところの野良わらふ藤姫此又ハ赤つら。
或ハ烏帽子大紋ハ袴又ハ紬豆烏帽子紋
豆ぐるみぐで者ぐるいとぐるり一ツ変りて板幕を
出さ物さとめる子。今の中うに二度の国言葉
力髪。横の赤袍ふ大左刀。市川流の絵張らふ
者ぐるで住居さハ二代目名人柏莚さ者ふも生
附の狂言ハ万民大福帳安倍宗任の役ぐ名人
山中平九郎で鎌倉権五郎景政ぐ柏莚で狂言

のキッカケハ平九郎ぐ大福帳へまとかける事で切幕
から者ぐるいとあるくけて。柏莚ぐ生るもぐき。
トコロガ平九郎ハ親国十郎と引張て狂言さ
者ふ名柏莚ぐるいと安く呂ろて青二才くと。
少ぐ弁者でもにきるふ。くふ物の言付それ
だら。大福帳ぐ者とかける者の住組ぐふぐさ
者ぐるいで者ドリヤ者おろうさうと者言斗
で板幕ハ方とれさゆ名二十七歳血言葉の
国十郎ふきとて者ぐるいと者ろくと斗りで。
只ふ板幕と生ぐさそこで弁者の言ハ板ふ。
又ハ者ふ者を上て角力切のやうにぐまく。
源石の平九郎も住方ぐるいろ者ぐるいと
ない者ろうドリヤとい者又者ぐるいと憂
ぐりで生ぐ。又弁者の間ぐねける。歩者ふ
人物ぐ掛ていろくとるぐろてふ。まぐハ弱い

さて因子郎が不図ねんねんと寝る所の行水
紙でなんぼうコデアイ拭いまくるあの絞り
手拭で平九郎が後立まぎれ[illegible]
「[illegible]」とする所へ[illegible]
[illegible]ご安い。因子郎が「[illegible]」
[illegible]ト大きな[illegible]
[illegible]
[illegible]

平左衛門は性質、[illegible]花の活ける小屋の[illegible]クレ
食べと云てきせることを半分出さず園さまが右
から吸付ようとすると左り向て左り右へ
とされば右へ向て高地にくるくるまわり
抓んで煙草を吸付さといふるゆゑ狂言
仕舞ゆゑ安いう樂屋へ入て平左衛門をきめ付
ようとすると平左ふぐいふゆゑ西の桟敷に居て女中
ゆゑ故きせるでちふせのごとくえさせう
とべでめの財代の役者に弄者をたぐひ悪
き合ものゆゑ其財代を自せどに昭と
辞めてそこをとき。ナントさき図い芸花つく
でいるいろ〳〵と狂言の筋ふるいとうのとまろ
江戸中は大評判ふるうて其翌日ちっぷい狂言
ふるうとあるゆゑ早速ふ治ゆゑ
ろさんばこそ実悪の名人と呼ばれ鬼女の姿

でハ女房ふ目をまわさせる平左衛門又相蓮ハ
役者の氏神とよばれ代〳〵新五郎といろ〳〵
ものゝ上まれ名誉といふのさ元祖といふくゆ
ゑ[illegible]ハ相蓮五郎で
の上まとよばれ其ほかハ「こ木氏でゆゑ
まゑでのろ〳〵ふと代道ふ浅ゐ「成金屋平左衛門
ゆゑふ屋ゑ浅ふ「沢村宗十郎ゆゑ西の松ゑ
屋ことのこと浅ゆゑ好能浅ゆゑ上まで手て紙さき
[illegible]伊勢の芝居へ浅ゐ[illegible]
しゆゑ。ホイ是でハ評判記の役者ゆゑ
さ〳〵ばゑ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]て
二番目平大坂「敵討手柔人「沢村宗十郎と
改名ゆゑ[illegible]
[illegible]「姫川利屋平左衛門
ひゑ見る。和歌の名人[illegible]

ゐるべきと申せ。が因。成のるゑ。「坂東太郎」
縁あそ江戸「畠田次郎」より「沢村惣子郎」と
ゆりつて伝付ゆいまご上の一字をそその数ゆせ
とぎの恵ゐとて浮き役をつとゐ「重井筒」の
狂言ゐ恵ゐ長代系ゐ情「曽我」ゐ「城也」「藤
れ付山家長左ゐ申ゐとゐねとゐもれゐり数役
と改ゐ「市村庄へ出役」そ出勤「今川姫」の狂
言ゐ数兼の役大でけて「沢越」池子くゐ長
ゐめづり」が伝ゐて弟我の子郎をよくいさき見
とて弟るもの「上上白吉」とゐるぬゐる。上
ゐ六七人ゆり「ゐ急て仕上そ「上上吉」「上上吉」
海老義に仕ぶゐとゐ仕くゐの浮世ゐ「坂東太郎」
ゆそ茂くの大ゆり「沢村宗十郎」と字ど改め。
大岩文内れ役ゐ「久米右衛門」ゐ存ゆそ大ゆり。
サア宴が又右宴で今り申。ゐ延享四年。来狐

「中村久米右衛門」付「大矢数四十七本」英数
ゐそ「沢村宗十郎」改て助ゐ又「大岩宮内」の役
ゆそ六月朔日より「初日出」。大ゐゆりなり。今ゐ
忠臣蔵七ゐ目ゐ付の酒子ゐ形をゐりそ侍を
ゐ年と色ゐ年ゐり大岩文内の役ゐ因ゐり。
大星由良之助の役ゐ。ゐゐり。長十郎文内の長
因を演ゐゆゐ。二代目酒子ゐ由良之助を勤ゐ
付。二ゐ巳と用ゐど「因」を付ゐてゐり。さまべ
大岩文内の名ゐ大星由良之助ゐ改ゐれども
「故吉田文三郎」大星れ「くゐ」形と考ゐも。役酒子ゐ
「風俗とゐゐ」「無木宗蒲」ゐ仕ゐ考ゐ。九にく
七ゐ目をそゐ用ひゐり。且ゐまゐ語ゐ洞ゐも。七
目の由良ゐ洞ゐ酒子れ「ゐ」と仕せて「まゐ酒若
ゐらゐたゐゐに大ゐい大神楽ゐゐゐるゐゐと
治ゐたゐゐ酒子れ大ゐ摘ゐるゐ。其ゐ手れ数ゐせ

大南りにて極上上吉の位を無類と唱へ江府
江戸にて海老義兵衛と唱へ極上上吉の
翌年長十郎と改名して江戸中村座へ
海老義と十二年ぶりに合古今れ大南りの
ども海老義は江戸の名物なる七十郎を無類
と呼ばれど両人引合はて大極上上吉は書ふ
根生海老義無類長十郎と呼三の皆七十郎
又く大あらにて付府無類となる海老義は
大極上上吉なり。あく同座の内海老義は不寿
なれど江戸中が呑込で上に立ば合点せぬ者
大立地ゆゑ巻頭なれど二枚目七十郎を無類
と世に呼江戸中は氣ふいふ。其翌年も同座の
新入世海老義大あらゆる長十郎の無類を
ゑて海老義はつけ無類の位あくまで有類と
いふのなりにて長十郎と呼至極上上吉と呼

たりされとあくまで無類の位は相違なけれ
ば元義はゆゑは宝暦三年末の新見世に
海老義は「き類」をえて新は海老義と大至極上
吉と長十郎と真極上上吉と呼せ一人あく
持義はは是ならは位なく位付の間へ名人
上すと出入れとあり長十郎は助る
高助と改名して間もつく高人とあり
海老義と無類と載る所浮世記は極の上
を越し後付へ直ゆゑ拾が相違なれ
は極の未だ及ばでなく浮世記は無類之
部と別を分天至極上上吉市川海老義真極
上上吉助三郎三助とめて名人上の位
もあるより近年役者の位付高ならとい
は二人の義は相違の位とさるもとして相違
役者の氏神とよべれ神は聖人の開山と名を

強せう先ものみどく初下[illegible]存田なを[illegible]共同
の添ふ藩とぜくれ時八[illegible]柏延ハ藍瓶の中へ[illegible]
ぬまれ[illegible]の安徳若[illegible]ぐ[illegible]の丙ふ[illegible]
の立者こうの位有次[illegible]ハ酒子一人は
混わり・叔めう付葉也とハふ淋潟師酒子長頁
ハて間ろるハ・ぞきるハ鏡ハ柏延より回回とハふ
人長ハ伯ハ柏延ハ[illegible]より上にてやこ寿
けるべ酒子ハ言てぞれ武士町人百姓坊ろ老人
若者傾城女房娘のこてふだの事ハ[illegible]ハ鏡
とそるとハ[illegible]ハれども松ハ鏡ハ[illegible]ハ通ド
さど・柏延ハ[illegible]ハ[illegible]ハ柏延
ハ生ハ[illegible]ハ[illegible]利ハるハ[illegible]ハ生ハとてハ鏡
道下り中をりのこと若ハ由足利の大至極と
真極と位付のハ[illegible]ハ[illegible]ぞざる俊又忠臣藏ハ
[illegible]ハ義仕芝居ハ獨参[illegible]とハふ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ぞう・杵義士の狂言ハ元禄十五癸午年二月
十四日初日ハて堀部中村仕ハおいて曽我夜討の
狂言ハ作り・千郎ハ中村少長五郎ハ[illegible]ハ[illegible]物
ぬ[illegible]故ハりて三日ハて相止ム是ハ義士の逆[illegible]
の[illegible]として・大坂ハそハ宝永三戌年五月五日初日
ハて・操ハ芝居行平[illegible]ハ[illegible]
ぬとハ[illegible]ハ切ハ其[illegible]太平記[illegible]作こ[illegible]
と者ハ[illegible]・ハ[illegible]ハ高師直[illegible]
大平記良三助ハ出初ハ・[illegible]ハ宝永七寅
[illegible]塚左程産ハて大矢数四十七本名人作者東三八作[illegible]
[illegible]同カハと名ハ出太[illegible]同秋[illegible]
も[illegible]ハ出ぬ[illegible]ハ大ハ[illegible]行[illegible]ハ[illegible]
ハて[illegible]ハ宝保十八丑年十月朔日ハ[illegible]
の切ハ忠臣金蔵冊[illegible]作とハ[illegible]ハ出・小幸[illegible]山
代ハて・[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]助ハ名ハ出ぬ・[illegible]延

元辰年八月十四日「行年廿五歳」「假名手本忠臣蔵」竹田出雲作と外題を出し、大勇りの評判つよりて、
[illegible]
[illegible]
「大和様」「上方様」
[illegible]
[illegible]
[illegible]

自慢するべこれわもだよ 仮名 仮名でゐる事
ちゐれども性ふふりしと今との兵衛あり昔の
役者へむしのてんぐ物は新小人の義経風今は役
者へ今は見物のまに入る義経風まるくの
ぶのりて日震うらにうるうるけれど 時世
くでゐる其内ゐる商ひの役者へいまく
器用ごとて義経道よりぶんへ今ゐませねばれと
昔見貧まがむしと見貧にも新のゐいことが
ゐりまるる試めくそへ後扇ゐ海ゐておきる
やませうまづは平で芳貧丸うそはじりの
ゐふばは、お氣にさるとがゐるとも、ハテ先れ
ちれとお差くでゐれがけて生ゐさるぐ商世ろ
と為まるる いさま それでも年ふふりし見貧と
ちるらびだまうちやゐるれ稲へで幸四郎名を
小四郎とぬるとゐせふ 仮名 まへむろ 松本幸四郎

とゝふ名ゝがのつさゆゑ、お手差のに難ぶ小四良
ヤ、こゝ、奥樂十町と助度浜とヤさうゑ、あうゑのの
いさこ　そんゑゝぬきりてきゝてあらべの天竺おく
河さくぜさく
去ぬ三日、おゝうお若流ぶるお拝人ぶの社西くまる
ナンダ八さん、面白く祝く祝仁ぶ又うせさとゝふ歌氏
ちで、へ、さう去祝くりのさ、コレちと老人ゆもつて
合てゝ、ゑさゝ、又ゝうくゝ祝くよ足でゝおゝ宗麿
手中ゝ三男ぶ、今ゝ若者のやうゝ巨燈兵法
ぢやア祝くおらぶ若ゝ射ゝ仁ゝちんのうだゝ安と
ゝんて仁通ゝとうぶねく、八百八丁に色塚て建ねく
ぢうぶ、壁暮と化ねゝ祝ゝ祝ゝ先ゝ捨
たのゝおゝゝふぶ住とうのよ、粹ぶの粹方だのとゝふ
ゑゝ、大通とゝふ姫でゝ、ゆうぶさ山の寒鳥待巣山の
郭公とゝふ通言ゆゝおゝゝうぶゑ、面白

狸ゆりま山ぶとゝゆゝ祝ぶゝゆゝ、ちよび洒落ゝ祝ちんん
拝りぶぶとうぶる奴とゝ仕さ山と名を付ぶ、ゆゝ
其ゝ後の通言ゝゝゝ仁ゆゝ、ゝゝゝゝ日本ぶ大の
拝りぶぶとゝ祝る大きくとゝ祝ぶりんぶ、昔ゝ一すとる
河さゝゝゝ大きゝゝゝ祝ぶ、ナンレ、社とどゝんるとゝゝゝゝ
日本だとゝゝゝ、ゝ大の拝りぶ、ナント大きゝゝゝゝゝ
ぶゝゝ昔ゝ万事物ぶ大きゝゝ仁ゆゝ祝ゝ子の
氣の大きゝのゝゝゝて祝ゝ役者ゝ義の大きゝゝゝイヤ
又男の大ゝゝゝゝゝ奥樂十町ゝゝゝゝ助五郎ゆ
中の度治ぶ、よくゝゝゝゝ色ぶ、ゝゝゝゝゝ奥樂ゝ大
奥樂ぶ、十丁ゝ駿ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝて居るのゝ二代目九百十町ぶ、偖き、ゝゝ
社射ゝ生れぶゝんでゝゝ助度治ゝ河津朕野とゝ
ちやゝゝでゝゝぶゝゝゝゝゝゝゝゝ
黒ゝで添氏山釋迦山獄ゝんとてゝんゝゝゝゝ

ねゞ。翁巻一ッぺい有ゞ。イヤ聽るせ人出るゝゞゆる。
其時ゞ仕狂云ハゆゝる義ゞ。ナ河津腰掛ゞ。角力
ゞ貴殿待負ゝ取ゝ。ゝ。ゝ。

たゞ流でゆきぶを府へ沼尻の芝居で王子路考が
梅が枝の清搔、志ゝも下ゞ七ッ下り、附も遠へ
ゞ小枝の中山へ通ゞ、こゝへ名人の二絃なる往昔の
役者の身の深さ、ものさ、こゝろ、小枝ゝ中山へ
そゝゝ孔道へ流れど、一念へ上まの路考、誰れ
劣る者も無いゝゝ、粗忽ゝらひゝゝ中山
まで届いゝへ、ナント格別ごゝゝ、夫中ゝゝで
へ今孔役者の一念へ我内の浪花妻へも寄
ゝもぢやれく、やゞでゝ山ひへ大きのゝ者ゞ、寄れ
清のゞゝとゝゝ音と、樂屋てゝゝゝと上総
房州まで、ゆゝえて、芝居大清と芝居の洞盧と
父遠ゝとゝゝ、ナント大きゝ者ゞゝゝ
ハテ、それでへ定で王子路考孔兵衛が姫よ孤
ゝゝゝ、ナニサ〳〵、時別ゞ七ッ下りだゝゝひ
ゝへゝゝゝ、ゝゝゝゝ自作の落咄、茂時

芝居のうるハ銅羅へ
世俗の通称

志江戸ゝゝれなきゝ二葉亭可楽、朝彦庚
夢羅久、そのゝ高名孔新連中、ものく
上ゞ達のゝ孔極化して、拙孔口調も孔芝敬
呉出ゝゝゝれ孔甚ゞ急俄、志ゞゝゝく爭坂ゞ
休めゝれ。

▲東西〳〵足より「実悪之部。でゞうま
をもちゞあとして○樂屋者ゝゝゝ。
「敵役之部。喧嘩好より○さゝゝ
まゞ「道外形之部。居往ぶり好ようゞ
○ひゝてんまゞゞ「若女形之部の宿
さゞり丈より○子ゝり下女丈まゞ
「花車形之部○若衆丈より○女こ
ゞ丈ゞ「若衆形之部○出丈孔花
丈より熟子役のこゝゝ、兼こ「惣巻軸
○芝居ゝゝ丈の俳判丈孔残扇孔者亜

[illegible]追つぐけて[illegible]。[illegible]
[illegible]本屋にて[illegible]且借本
[illegible]物[illegible]方様なりうれ[illegible]
[illegible]へ[illegible]れ。客者評判記の[illegible]
[illegible]の上に評判[illegible]
巻上之終

江戸 式亭三馬 欽曰

自跋

漢書ハ汝南の月旦評あり。
源語ハ雨夜の品定ハ[illegible]。
中上[illegible]平[illegible]唐山の時代
狂言[illegible]。上上[illegible]和げ[illegible]吾
日本の世話狂言。所謂俳
優評判記乃鼻祖ハ[illegible]。
笠[illegible]菊卓吾両字ハ[illegible]板。
[illegible]咬[illegible]劇在行を。西
鶴團水ハ[illegible]。自笑

其績ふ止まる。後年其笑
瑞笑ふ的。其意を績ぐ
評しまるべし。今尚自笑の孫か
傳うと手しるの評判あり。さるど
伎藝ふ評のまにまに拘攣
通と呼まる先哲いまど看的人
の評論あるをきまざと在下に
一個乃好劇的ふ浮窩。一時
戲場ふ遊ぶふ日。意馬を
戲門ふ繫ぎ。心猿と戲房ふ

放ち。眼を東西ふ棧道ふ配り。
耳ふ西側の荃棚ふ傾ける。
尖棚戲棚合〻両面の照子
に倡〻。利国乃打扮。看的の
介科。形容ふ影綜ふ從ぶ
如〻。聊ぶ眺〻。注げば我ふ生
ゆ〻且ふ。淨あり浪子ゆ。
両脚ふ諢ふ若且副。小生ふ
小且ふで。皆〻ふ乃演劇
あ〻。音奏曲ふ音ふ。

古稀を正面より眺めき。
看的人一同小雑劇ちゃ斉
〳〵。戯子反〳〵観劇すれに
似〳〵。素〳〵脚色いえりどう
えてぐり。古寔ち見功者昌賈連
さしの子でんぼうけん左郎。
何でも三拾八文字屋。江島屋 自笑が家名 其磧が家名
風手墓を掘り。ぢぐつと立
〳〵りえと小冊。目〳〵客者
評判記といふ因縁〳〵故

其〳〵後序さや〳〵。

文化七年庚午ち九月。
酒ぶ病発若隠居。病後
保粮と名を付けて金蘆
山麓ち別業ふ。二箇月
余り居績の間。

式亭三馬戯題

○五臟此所を御被為なをといい

仙方延壽丹

▲まげものに代百代二文
▲桐のたとへに代四文。代二朱
代金百疋一剂代銀廿匁

精製

▲寸一ぢんとまり一せんきとつうと▲男女をを虚かもやはひのうちくしひけ孫くろ新をあくぐりくきをあきいたき▲ろ不寄力ようきく人男ひくあ▲中風に寄四ふ所を事ゐるぶ一ぶ三ひぐさるえ者ひ足武いくとむ者▲寄変寄ようりらぐいえせえ出ひやあせ孫わせ出スいせきろ一やまひとたん血まぐらせ孫出ろ者▲せいのつきばつるめまひ三ぐ三ろのぶ武いせ孫きすわ出ろ者▲ろ病ろえ疲ススくあろうのあらぬ痛ぶ者▲巣ぐぶ痛ぶ中ア病ろえ疲ススくあろうのあらぬ痛ぶ者▲男寄きぶ中かさをまく痛ぶスい弟かのんどらぐ武者▲男寄きぶ中ふ一ぶんをぶ武いひぶひえをふかきぶ症スいれ血出ぶ者▲中ふ年場ふあくをぶ武いひぶひえをふかきぶ症スいれ血出ぶ者▲五痔スくひまあをぶ者▲一切者ふらあ三男ようく奥ぐまーかをやをふめふ▲ふ寄ぶ出ぶらあ三男ようく奥ぐまーかをやをふめふ▲ふのめををたいろをる者▲中四ぶくんかをいををちせおろくる者▲奶人ちの乃見やくふ者ふんちぶ四ふけをらひぶ痛を武いさん後奥ふかをろくをぶえやせぶ者▲奶人ぶんおを男を行を安をせーむ▲ちくわをう男をよく乳けをぶ者▲男女切痛後食ちをまを方つぶを見を者右のかくんーくを乳れ後ぶ者ふ

本家調合所　京都寺町通五條上ル町西側　田中宗悦

江戸賣弘所　本町二丁目南側　武亭三馬店

取次所備附ゆき有之

右御茶之儀ハ粒を茶を本石町おそ南伝来茶私義
京都本家内縁ハ本家ハ宇治仕延寿丹
責弘ハ江戸本店之儀茶ハ中国ハ国産ハ質ハ
中国ハ国産ハ質ハ仕延寿丹
茶ハ中国ハ国産ハ質ハ仕延寿丹
茶ハ中国ハ国産ハ質ハ仕延寿丹
茶ハ

引移。例の無欲と羅して
式黄表紙を滿く。賈人
世〻文人屋〻二役勤る藥店。
こゝを他生れ延壽丹きゝハ
こゝ彫〻なる師匠の筆頭。此
頁帳場は元ふ屋〻て客
者評判記を閲ゝる。是
頁連よりはゞめて出番の子
供子いゝ男ゝで。能〻人情
を穿ち。こゝ癡情を本〻
ゝ。本家は役者評判
記をいさゝゞ出店乃家

都が奇〻いと。此〻川出の
ひゝゝぐんきも。ほとゝゝ
ゝ評判記。虚誕ぢや
ゝ勇本町は和玉

あ武は方ふ向で萬ゝと
いふ三馬の閲ぬ楽とひう
意馬心猿は毫ふさゝて

門人
古今亭三馬述

跋

三馬先生客者評判記を編むや
さあるふ。あの辺を跋を書しと思へど。
書ふ板元は是迄あり後に天世日し掛
乞ひの。一句一章物ぬしくんこの出バ
ちなく是非なく三馬が屁馬に乗く
其通り〳〵と志るのみ。

門人
樂亭馬笑誌

○此油見世八三馬が店のそばにあるなり

江戸 御御 羅油 香奥類書
御化粧道具

本町弐丁目 江戸桜子七

客者評判記前編跋

吾式亭先生。戯号は一字を取く
馬と馬ふ作り。これを意馬心猿と表て
義押ふ用ひ来れり。仍て吾儻おるぐ
甚形を博び。生聲色をはりて三鳥ハ
古今亭の古は字をとりて古ふ作り。益亭ハ
二友は友の字と訓く友ふ似れ亭を
けるふ一得齋と呼ぶをとりて。一仍を
五ふ作れり。是別一正は大猿よりて。
許多の小猿が戯文。ひろく業をきくん
とて毫ふ捜べれ我なりけるさ徒ば
先生常ふ戯れていふく。你們二の字を

名告り。馬の印を略して。師茅は約を盟へども。二七三八は會日なれば。四書五經の講釈もあり。師として学んざ学もなければ。茅として教る決もきらぶ。且師は七尺去原禅儀もいふ程ば。茅は三文貰ふ心もなし。茅子ば師道欲ゆ迄ば茅子欲。皆友食は戯作者魂それはごりしさ物数寄始ら。有難さうは兼押まで。倡ッこびう真倡て呉れる人。陰嚢も法りうと貞昌連中。及て師道が茅子は影ふ。七人だりも五の印章。抑意馬心猿の由来を委く尋ずふ。意馬

心を鹿と伴ふて。酒色は街を馳る故お利口なるお方は目あ。一心足ふね馬鹿者と謗はへ。心猿は筆を弄んで滑稽の反ふ遊べど。名人上手の諸先生あ。二本足ね戯作者と呼だるべ。それを紙ぶ各人。千疋の美猿あ。我一疋は鼻剛猿を引ぱるが如。遽莫下手の横好耳学問は人を侮の切抜文章神儒佛はやらん店かぶ。何でも四文は小買に求て。せう委と主紅堂生なれば。おまへぐも精出して。氣性の高いを下直ぶ引ヤげ。唯安賣を勉る人能ある鷹ハ爪を隠と。四角な文字を

人を四角な言を鼻ふみどろい
ことを言んとて樽ばかりといふと勿れ
ぶくぶくに笑ひせよ。惡落をすることを勿れ
地口を悪く言人。秀句の善く云人を
派ものを。狂言を派ものを。筆を採ぶべ社妻を
常ものを多辯を恥よ。笑顔をして笑ふ
戯作者は本意。舌頭をして咲ふべし。
幇間のおまへ子とおもひ。係と段取目安
と流行持の場捨る場の仏得ぬ侍と
いふも銭を病年効をして自と考ひ尼く
文人騒客を。戯切社戯子をたとへば生
且両脚。浄。各神傷佛孝荘れ役割ある

中ふ。戯作者へ打諢をすることを看客が
首ふらを直ふ人をふゆ。利屋を以ふ
すぐまふぐ。絲瓜皮ふ不利屋。利ばらして
どうなせば人自ら咲ふ。ナ儒先生國
学大人ふらは。教明せふ。猶ふ追ふて
秘密に贅の保細らしい道戯形ば優長
の真似を利屋臭き演劇を所ふ齊く
看官おきあがれといふて一人もヤンさとらふ
ふ。されば己が才の程を知り差差は利心
せよ。ちつとりふりに腮たたた博識ぶ
博試ふ竺ふ只顧文盲をゆふして白癡を
嗤ねば無事息災ふ。これより外ゆ傳授

若此上ゐもお堅なるべ。三八の日を定めく。
近松が院本を講じ。五十九日を約して風流
が狂文を論ずべし。夫も可佐くて楽なる
べし。と例の額ゆ八の字出て。呵〻大笑耳を
洗へぬく。予仏教諭を得てよろこぶ。
師弟の盟約浦ゆ恒ゆ先生ゆ草庵と汚ふ
頃日客者評判記を閲て肇て教のたぐ
ざるゆ騒く嗚呼趣向の新奇なるや自笑
其磧も筆を痛く文辞の自在なるや
自隨落風来も頭を体ゆ流行の速き
と穿鑿ゆ深きと西鶴團水のたくひ及ぶ
所ゆあらん嚮よ酬所氣質ゆ後篇小野
篁園虚亭畫を初として芝居幕ゆ外あり。
或ハ浮世風呂ゆ浮世の人情を穿ち或ハ
胸機関ゆ人心早替を悟らゆ其他小冊
詩寸あれど。古今ゆ未發の評論。
寔ゆ我場穿鑿の一大奇書なりてに
拙ゆて。先人由良氏義平ゆ称誉ゆ倣。
予陰裏もはりさあるゆ。一番どゆ讃
て曰吁先生ゆ捷才浜中ゆ蓮沙中ゆ金
ゆ〻ゆ〻むりゆ警。今新〻あれゆ。
鎧錢中ゆ文錢。万子の中ゆ好ふるべし。
意馬いうんゆ鹿と伴ふべき。心猿なんゆ
三年呂らゆ戯作者ゆ〻ゆ夫意馬ハ

伯樂を遭ひて。評判千里を走り。心猿猴鬼
ふ侍らじて。戯名一聲ふ高き名思へど
もの義押へ他ふ吉兆をうえ無上
押えをふ讃さいまにぃぐぎ体直腕さん
生ーて。師匠の業ふ教諭のせりぬとぉり
の俗なる声色も。真赤る後ふ筆とりて。
おとぐぐなぐらい辺ぅぅるみーる。

小石川の山猿と呼ーー
一得齋桃種成ことし
はじめて戯作ふ改名
徳亭三孝欽口

客者評判記殘編 全三冊 初編 初稿ふ客者おのくあいをやうちれ面く
ゆゑ初稿ふ出ぬ
引續て出高後ふ著る多小冊ふ初編出版ふ

江戸 戯作者 本町二丁目住 式亭三馬編

葛飾 浮世繪師 本所五ノ目住 歌川國貞画

筆・硯 石原 駒 知道書
離工 浅草 菊地茂兵衛刀

文化八辛未年正月二日開市
大阪心斎橋筋傳馬町 鹽屋長兵衛
正本所 江戸通油町 鶴屋喜右衛門
同 田所町 鶴屋金助版